

Muv—Luv modeler warfare

ガンオタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

学校で『模型部』に所属していた高校一年生の松宮タクミは、神様の不手際で、部活終わりに学校の階段から足を滑らせ死んでしまった。自分のミスで殺してしまったタクミを、神様はお詫びにとタクミがこれまで買い溜めしていた”模型”『ごと異世界へ転生させる。

夢にまで見た異世界転生に喜ぶタクミ。

だが、転生した世界は超ハードグロテスクな世界だった。

・注意事項

当作品は、原作時系列の改変及びご都合展開が多々あります。なお、作者の文章力によっては誤字脱字が散見される場合があります。

ご注意ください。

イメージソング

OP 解読不能 (ジン コードギアス反逆のルルーシュOP)

ED BEST of my Love (安田レイ TV宇宙戦

艦ヤマト2199ED)

目次

戦力一覧表	1
第1話 模型少年転生する。	4
第2話 そうだ、名前をつけよう。	12
第3話 森ではなく『島』、その名も『シルトクレーテ島』	21
第4話 魔窟	32
第5話 報告会	39
第6話 戦闘準備	54
第7話 サイコパス	65
第8話 『人形使い』	78
第9話 策謀	86
第10話 Operation Great Discover	95
ry (偉大なる発見作戦)	
第11話 嵐の前の静けさ	102
第12話 重力戦線	109
第13話 開戦の狼煙	115

戦力一覧表

*戦力一覧表

*組織名

『PMC・レイブンスロック』

タクミが作り上げた私兵集団。所属する兵器や兵士たちは、タクミが所有していたプラモデルやフィギュアで構成されている。

国籍は様々で、アメリカ、ロシア、イスラエル、イギリス、ドイツ、日本、中国などの兵士たちで、元模型ではあるが、高い戦闘技能を有している。特にタクミの身辺警護部隊に所属する兵士たちは、アメリカデルタフォース、ロシアアルファ部隊、イギリスSASなどの一線級部隊である

そして、兵士たちは皆、自分たちの創造主であるタクミに対して絶対の忠誠心を抱いている。

レイブンスロックは、純粋に見ても私兵部隊でありながらも、その戦力は国軍並みの戦力を持っている。

イメージはゴーストリーコンワイルドランズに登場するサンタブランカ

・陸上戦力

機甲戦力

(主力戦車)

M1A2 SEP型エイブラムス(米)、T-90MS(露)

(その他装甲車両)

M1126ストライカー(米)、BTR-3(ウ)、MATV(米)、

ブラッドレー(米)

(ロケット戦力)

PAC-3(米)、アイアンドーム(イ)、THAADミサイルシステム(米)

(ミサイル戦力)

ハイマース(米)、MLRS(米)

・海上戦力

主に日米の艦艇で構成される。

・航空戦力

主に米、露の機体で構成されている。

米国製機体

F/A—18、F—35A、A—10、C—17、B—2

ロシア製機体

SU—35、アントノフ225

そのほか無人機やヘリも同じく。

これら全てはシルトクレーテ島内の軍需工場で生産されている。

・核戦力

SLBM（潜水艦発射ミサイル）

ボレイ級原子力潜水艦二隻（SLBMを一隻に16基）

タイフーン級原子力潜水艦二隻（RSM—52を一隻に20基）

オハイオ級原子力潜水艦二隻（トライデントD5を一隻に24基搭

載）

ICBM（大陸間弾道ミサイル）

RS—12M

DF—41

・MS戦力

主にジオン、連邦の量産機で構成されている。

ジェガンシリーズ、ズゴック、ゴック、アंकシャ、グスタフカー

ル、ゼズール。

*シルトクレーテ島

タクミと、彼が率いるレイブンスロックの拠点である北太平洋にある孤島。面積はおよそ2000平方キロメートルあり、密林や湖などの豊かな自然と、謎の遺跡が数多く存在する。（イメージはジャストコース3の舞台である島国メデイチ共和国）

鉄鉱石やレアメタルなどの鉱物資源のほか、天然ガスや石油などの莫大な地下資源も同じく存在する。また島の山岳地帯にはウラン鉱脈がある。

第1話 模型少年転生する。

第1話 模型少年転生する。

「~~~~♪~~~~♪」

夕陽が差し込む放課後の教室で、1人の男子高校生が鼻歌を唄いながら、模型を組み立てていた。本来であれば、学校に模型などの不要物を持ち込むのは校則違反であるが、彼松宮タクミが通っているこの高校では「模型部」に限ってのみ持ち込みが認められている。

もちろん、タクミは模型部に所属している1年生のため、なんの問題もない。

これもれつきとした文化部である「模型部」の活動である。ちなみに、タクミが現在製作している「WW2ジオラマ」は、来週の文化祭に出展するものだ。

『校内に残っている生徒に連絡します。』

まもなく、部活動終了の時刻になります。部活動を行なっている生徒は後片付けと清掃を行い、戸締まりを確認し、速やかに帰宅しましょう。

繰り返しー』

「お、もうそんな時間か。じゃあ、片付けますか」

部活動の終了時刻を告げる校内放送を耳にしたタクミはそう呟くと、製作途中のジオラマを落とさぬよう慎重にロッカーになおす。

そして、製作途中ででた削りかすやランナーなどをゴミ箱に捨てる。

「掃除は終わりど、あとは窓の確認だな。ーおっと、工具セット忘れるところだった」

窓の戸締まりを確認しようとしたタクミは、机の上に置いてある自分の工具セットに気づき急いで通学バックにしまう。

工具セットには模型製作に必要なヤスリ、ニツパ、デザインナイフ、ピンセットなどが入っており、タクミに言わせれば「商売道具」と言えるものだ。

「戸締まりよし、照明よし、暖房よしと。さて帰ろ」

閉め忘れや消し忘れがないか確認したタクミは教室の扉を施錠する。そして、教室の鍵を1Fの職員室に返却するために照明が消え、肌寒い廊下のを歩いていく。

「だいぶ寒くなつたな……そうだ帰りにコンビニでなんか買って帰ろ」

廊下の窓から見える紅葉に彩られた山々を見ながら、季節の移り変わりを感ずるタクミ。そして帰宅途中のコンビニで買い食いしようとする。

「はあく、だけど来週から体育の授業が持久走つてのは、マジ勘弁してほしい」

タクミは溜息混じりにそう言う。

タクミが通う高校では冬休み前に全校生徒参加のマラソン大会があり、それを無事終えることでお待ちかねの冬休みを迎えることができる。ちなみ、そのマラソン大会では完走タイムというのが決まっており、規定のタイムをオーバーしてしまうと冬休み明けに追走という罰ゲームがある。そのため学校では毎年この時期になると、全校生徒完走というお題目のもと体育の授業が全て持久走となる。

「まったく、僕みたいなのが走ったら膝がぶつ壊れて、生活できなくなる」

これまでの見事な不摂生のおかげで、タクミの身体は見事な肥満体型である。運動嫌いなタクミにとって、マラソン大会などというのは、陸上部やサッカー部、それに野球部などという「陽キャ」と、図書部や将棋部、タクミが所属する模型部の「陰キャ」という絶対的スクールカーストを再度生徒たちに認識させることを目的とした行事で、ある意味精神的苦痛を目的とした「拷問」であると考えている。そんなことを考えながら、2Fの踊り場まで来たタクミだったが、階段の一部が水で濡れているのに気づかなかつた。

「おーそうd……えっ『ドドドっ!!ガシャン!!』」

階段が濡れているのに気が付かなかつたタクミは足を滑らせて階段を転がり落ち、各部活動が大会で得た表彰状などを掲示してある展示ケースに頭から盛大に突っ込んだ。

「ーおい！ なんだ今の音って、おいおい！」

ガラスが割れる音を聞いた教師が慌てて、職員室から飛び出して来る。そして頭から血を流して倒れているタクミを見て驚きの声をあげると、急いで携帯で救急車を呼んだ。

ー松宮タクミ。享年16歳。死因ー 〃神様が誤って魂を燃やしたことによる事故死 〃

「本当に申し訳ございませんエエエン!!」

タクミの目の前で見事な土下座をし、大声で謝罪の言葉を言う女性。それに対して、タクミは女性を落ち着かせようとあたふたしている。

「あの、もうほんと、ほんと良いですから。頭を上げてください 〃神様 〃」

先程から何度も何度も謝罪の言葉を口に行っている神様に対して、タクミは神様 〃を落ち着かせようと声をかけ続けながら、こうなった経緯を思い返した。

階段から足を滑らせて、展示ケースに突っ込んだタクミだったが、目を覚ますとなぜか真っ白な空間にいた。慌てて起き上がり自分の状態を確認すると、怪我などはしておらず学生服を着たままだった。それに通学バックもそのまま、中身も異常なく揃っていた。

啞然としていたタクミは突然、背後から嗚咽まじりの謝罪の言葉が聞こえたため、振り返るとそこには顔を鼻水や涙でクシヤクシヤにし、ひたすら謝り続ける一人の女性がいた。

女性の言葉をなんとか聞き取り要約するところだ。自分はタクミがいた世界を管理する神様で、徹夜で魂の選別作業をしていたが、睡眠不足の影響で居眠りをしてしまい、タクミの魂を誤って燃やしてしまった。気づいた時にはすでに魂は灰になっており、生き返らせることは不可能と言うことだった。

「ううう……グスツ……グスツ……!」

神様はだいぶ落ち着いてきたが、まだ涙を流している。女性が涙を

流しているのに、きまりの悪さを覚えたタクミは持参していたハンカチを差し出す。

「どうぞ、使ってください」と言っ、微笑みながら神様に手渡す。

「あ、ありがとうございます／＼／＼／＼」

ハンカチを受け取った神様は、頬を紅潮させながら、感謝の言葉を述べる。涙を拭き取り終えた神様は綺麗にハンカチを畳むと、「洗濯して返します」と言っ、白いドレスのポケットに直した。

「(……綺麗な人だな……)」

改めて神様の顔を見たタクミはそう心のなかで呟く。すると、神様は「アワワワ／＼／＼」と顔をゆでだこの如くさせながら、顔を手で隠そうとする。

「そ、そんなこと言われたの、久しぶりですう」

「エッ！ もしかして、今思ったこと分かつたんですか？」

自分の心のなかの呟きが、まさか分かつてしまったのかと驚き、そうタクミは問いかけた。

「はい。私、いちよう神様なので」

「そうなんですね。あのそれで神様……僕ってこのあと、どうなる感じですか？」

タクミはなるべく、神様を刺激しないように顔色を伺いながら聞いてみる。また号泣されたら堪ったものではない。だが、神様は深呼吸をすると、背筋をピンツとさせ、真っ直ぐにタクミの目を見つめた。

そこにいたのは、さつきまで号泣していた女性ではなく、まさに全ての万物の創造主である全知全能の神様であった。

綺麗な女性から見つめられ、今度はタクミのほう、恥ずかしくなる。

「はい。タクミ様には、転生していただきます」

「えっと、転生ってことは特典とかも希望できる感じですか？」

「はい。今回の件はすべて、こちらの責任ですので、ご希望のものをなんでも仰ってください」

神様の言葉を聞いたタクミは小躍りしそうなほど、興奮した。タクミは模型製作も趣味だが、よく読書もしていたので、ラノベで有名な

異世界チート転生系もよく知っているのだ。

いろいろ考えた結果、タクミは神様に希望の特典を伝えた。

1. 自宅に溜め込んでいる模型（プラモ・ガンプラ）や玩具と一緒に持っていける。
2. 組み立て模型は本物と同様の機能を持ち、タクミは自在に操ることができる。
3. 模型や玩具が壊れたりしても、自動でタクミの元に戻ってくる。
4. 必要な物資は全て携帯から補給することができる。

「えっと……大丈夫ですか？　いろいろ言っちゃいましたけど？」

我ながら無茶苦茶なことを言っていることに気づいたタクミは、神様にそう問いかける。

すると、神様は「問題ありません」と笑顔で言い、希望事項をどこからともなく取り出した紙に書き記していく。

「お待ちせしました。完了したので、早速転生の儀式を行いますので、こちらに来て下さい」

特典の準備が完了したのか、神様はそう言うと、タクミを特殊な魔法陣が描かれた台座に案内する。台座に乗ったタクミは、夢にまで見た異世界転生というもの経験できることと、どんな世界に転生するかと心躍らせる。

「それでは転生の儀式を始めます。準備は良いですか？」

「はい。よろしく願いますー！」

神様の問いかけにタクミは元氣よく返事をする。そんな姿を見た神様は、まるで愛おしい我が子を見る母の如き、眼差しでタクミを見つめる。

そして、いざ始めようとした時に、タクミが「ちよつと！　タイム！」と大声で叫んだので、神様はコケそうになった。

「ど、どうしたのですッ！」

「え、いや……その『家族にありがとう』って伝えてもらえませんか？」

タクミは頬を掻きながら、そう神様に言った。

16年という非常に短い人生だったが、ここまで育ててくれた両親には感謝しかない、と。

「ええ、必ずお伝えします。そして御両親は私がしっかりお守りします」

タクミの言葉を聞いた神様は、強い意志と覚悟を込めた瞳でそう答えた。

「よろしくお願いします。では、初めて下さい」

「はい。では開始します」

神様がそう言った直後、タクミの体を光の粒子が包み始めた。光は徐々に強くなり、タクミの視界が遮られていく。

「いざ、新しき世界への道を開かん！」

神様がそう叫んだ瞬間、タクミは一際強い光に飲まれた。

そしてその光が消えたとき、タクミだけでなく神様もその場から姿を消し、あたりは静寂に包まれた。

「……………うん？…うん？」

深い森のなか、生い茂る木々の間から差し込んできた日の光の暖かさを感じ、目を覚ますタクミ。そしてきつと状況を確認する。

「えっと、特に異常はなし。制服に、バックもあるな。中身は……ちやんと全部ある」

周囲の確認が終了したタクミは一息つくくと、今度は体を動かし始めた。

足の曲げ伸ばしに手の開閉。手首足首の運動にその場でのジャンプなどをやってみた。

「体も異常ないな。携帯、携帯つと、あったあった」

制服のポケットから携帯を取り出し、画面を確認する。

「ん？」1件の通知があります。って、誰からだ？」

画面に1件のメールを通知する表示があったので、メールアプリを開くタクミ。メールの送信者は彼をこの世界に送ってくれた。神様。からで、内容は特典に関する説明文だった。

「ふーん。〃利用方法はまず、自分が作りたい模型や玩具を携帯のアプリから選択する。選択したら実体化するので、専用工具で組み立てる。組み立て終わったら、携帯のカメラ機能で完成した模型及び玩具を撮影。そしたら画面に『実体化』というアイコンが表示されるので、それをタップすることで本物と同じ機能を持つ物体へ変化する、と。試しになんかやってみるか」

特典の利用方法を一通り読んだタクミは、さっそく携帯を操作してみる。

「お、これかな。〃模型・玩具一覧〃って表示されてる。どれどれ……うわ、全部入ってるじゃん。結構溜め込んでたな僕」

家が裕福だったので、小遣いの大半を模型の購入に充てていたので、部屋に大量の模型や玩具を溜め込んでいたのだ。一覧のなかにキャンピングカーのミニカーがあったので、それを選択する。

すると目の前に光の粒子が集まり、ミニカーが現れた。

「うわっ、本当にできた。すげえ〜ッ」

目の前に現れたキャンピングカーに驚くタクミ。そして内部を確認にするために、横扉を開けて中に入る。

もともとのミニカーがフィアット・デュカトのキャンピングカーだったので、内部は全長7メートル未満のボディに大型のツインベッドと、台所にトイレなどの水回り、そしてソファやテーブル、各種収納スペースなどが一通り設置されていた。全体は白を基調に黒や木目を合わせた内装はどことなく優雅な雰囲気を漂わせていた。

備え付けのソファに深く座り、ゆったりとくつろいでいるタクミ。目の前のテーブルには車内に保管してあったお菓子やジュースが置いてあった。

「どうしよう。まずは、ここがどこか知らないといけないな……そうだ、〃ジオラマ〃を完成させよう」

しばらく考え込んでいたタクミは何か思いついたのか、一言呟くと、学校で制作途中だったジオラマを携帯から召喚した。そして通学バックの中から、制作キットを取り出すと制作を始めた。

――果たして、タクミがいるこの世界は一体、なんなのか？

第2話 そうだ、名前をつけよう。

第2話 そうだ、名前をつけよう。

早朝。

西から出てきた朝日が、深い緑に覆われた山々をオレンジ色に染める。木々の隙間から差し込んだ光は、森の中で停車していた1台のキャンピングカーを照らす。

「……………ツ……………フワァ〜、朝か……………」

カーテンの隙間から差し込む日の光と心地よい暖かさを感じとったタクミは、そう言つて起床すると、大きく伸びをする。ベッドから下りて、備え付けの洗面台で顔を洗う。

「冷てえ……………『トントントツ』ん？」

水の冷たさに驚きの声をあげながら、タオルで顔を拭いていると、扉をノックする音が聞こえたので、タクミは扉の方へ歩いていく。

「おはよう。 バトラー、今日も朝早くからありがとう」

扉を開けたタクミはそこに立っていた一人の男に朝の挨拶をする。

「バトラー」と呼ばれた男は、タクミの挨拶に笑顔で答える。

「おはようございます。タクミ様。朝食のご用意ができております」

「了解、今日のメニューは何か？ バトラー」

タクミはステップを下りながら、自らの専属執事に問いかける。

皺ひとつない黒い燕尾服を着用した執事バトラーはタクミが製作し実体化させたフィギュアだ。容姿は髪の色は黒色だが、特徴的な瞳が血のように真っ赤であるところだ。

まるで少女漫画に登場するようなイケメン執事は、自らの主人の問いかけにイケボで答える。

「はい。本日の朝食のメニューは、ポーチドサーモンとミントサラダをご用意致しました。付け合わせはトーストスコーンとカンパニーユが焼けておりますが、どれになさいますか？」

「聞いたことない名前ばつかだ！よくわかんないんだけど）う〜ん、スコーンでお願い」

「かしこまりました。では、こちらへ」

バトレーはそう言つて、タクミを朝食が用意されている所まで案内する。

二人が歩き出すと、完全武装した兵士たち、〃がどこからともなく出てきた。彼らは、タクミが護衛用に製作し、実体化させた1/35アメリカ海兵隊の模型兵士たちだ。

格好はウッドランドパターンの海兵隊迷彩服を着用、その上にプレートキャリアを付けている。被っているヘルメットはLWHだ。兵士たちは手にしているM16A4やM249SAW（分隊支援火器）でタクミを守るよう、周囲を警戒する。

護衛の兵士たちに守られながら森のなかを歩いているタクミは、一歩うしろを歩いているバトレーに問いかける。

「兵士たちに異常はない？」

「ええ。召喚された兵士たちに異常はありません。基本、私たちは食事や睡眠などは不要ですので」

バトレーはにこやかにそう答える。

タクミが召喚した兵士たちは、もとがプラスチックの模型だったためか、人間と同じように行動しながらも生命維持に必要な食事や睡眠などが不要なのだ。疲れ知らずの兵士たちである。

「（はあ……サボらず働いてくれるのはいいけど、心配だな……）だけど、何かあつたらすぐに報告しなよ」

いくら最強の兵士たちでも、作業中に怪我や病気になつてしまふかもしれないため、タクミはバトレーにそう伝える。

「なんと、お優しい」

「へ？」

バトレーの言葉を聞いたタクミは素つ頓狂な声を出し、うしろに振り返る。すると目にしたのは、臣下の礼をとる自分の執事だった。

「ちよ、ちよつと！ 何してんの!？」

「我らの創造主であるタクミ様は、なんと慈悲深いお方なのでしよう。我らを創造するだけでなく、大いなる愛を持って接してくださいるとは……我ら一度、あなた様に更なる忠誠を捧げます」

専属執事の忠誠発言になんと答えていいか分からず、タクミは慌てて周囲を見る。

護衛の海兵たちが、何事かと騒ぐ。

「え、あ……うん。その頑張ってね」

「はい！ 誠心誠意頑張らせていただきます」

「(なんだろうか……今、一瞬犬の尻尾みたいなのが見えたような?)」
元気よく答えたバトレーのお尻から犬の尻尾のようなブンブン揺れていたのが見えたタクミであった。

そんなこんなで、ようやく朝食が用意された場所に到着した。

そこには綺麗なテーブルと椅子が設置しており、傍には数人のメイドが待機していた

「キャンピングカーで、別いいのに」

タクミは椅子に座りながらそう呟く。するとタクミの背後に立ち、椅子を引いていたバトレーが小さく首を横に振りながら答える。

「それはなりません。我らの主人であるタクミ様がキャンピングカーで食事など……朝食は1日の行動に必要な栄養を摂取する大切なものです。だからこそ朝食を摂る場所もとても大切。このように周囲を自然に囲まれ、鳥の囀りを聞きながら食事をする事で、心の平穏も一緒に得られるのです。まさに一石二鳥。それに『貴族』たるものの品位が大切なですよ」

「確かに自然の中で食事をするってなかなかできる事じゃないね。あと、僕って貴族なの」

「はい」

いつの間にか貴族という扱いになっていることに驚くタクミだったが、並べられた朝食をあらためて見ると感嘆の息をもらす。

「いやあ、でもすごいね。どれもこれも美味しそうだよ」

「お褒め頂き恐悦至極でございます」

食材はすべてタクミの携帯から召喚したものだ。そして調理したのはジオラマを製作する時に使用する一般人ミニチュアのなかにあったコックが、キッチンカーを使って料理した。

召喚して驚いたのが新鮮な食材はもちろん酒や調味料などの料理

に必要なものだけでなく、お菓子やタバコ、高級ワインなどの嗜好品。その他には洋服、燃料や弾薬、医薬品などを制限なく召喚することができたことだ。

「ほんと、チート様様だね。うんじゃ、頂きます」

チートを授けてくれた神様への感謝の言葉を口にしながら、タクミは手を合わせる。そして、朝食を食べ始めるのだった。

――朝食終了後。

美味しい朝食を終えたタクミは食後の口直しの紅茶を飲んでいた。紅茶の香ばしい香りが鼻腔をくすぐる。

「う〜ん♪ 美味しいねえ〜、これぞ至福のひと時」

白磁の美しいティーカップを手に持ちながら、タクミはそう感想を述べる。

彼の周りでは、ファッションモデルの表紙を飾るような美しい容姿のメイドたちがせつせと食器を片付けていた。

「ん？」

ふと、一人のメイドに視線がとまるたタクミ。

視線の先には綺麗な長い金色の髪を持った綺麗なメイドがいた。

「(キレイだなあ。……まあ、あの子も僕が製作したんだけどね)」

金色の髪がクラウンハーフアップなのは、製作時のモデルに前世で読んだラノベキャラを利用したからだ。

「(うん。やっぱり可愛いなく、メイド服とあわさって、清楚感がさらに増してる)」

自分が製作したフィギュアを眺め感慨に耽りながら、紅茶を口にす

る。

「あの者を 〴〵所望 〴〵ですか？ タクミ様」

『『ブハッ』ケホッ……ケホッ……な、なんだい突然』

突然、耳元でバトラーが囁いた言葉に驚いたタクミは紅茶を盛大に吹き出した。そして、呼吸を整えると隣に立つバトラーに問いかける。

「おや、違いましたか？ なにぶん先程から熱い視線を彼女に向けて

いたので、もしやと思ひまして」

「そ、そんなことはない！ 自分が作った者が意思を持って行動していることに、感慨を覚えただけさ」

恥ずかしさを隠すため、まるで顔をトマトのように赤くしながら、バトレーに反論するタクミ。

タクミの慌てぶりを目に気をよくしたバトレーは続けてこう言った。

「もし、その気になられましたら、いつでもご命令ください」

「え！ まじか！ そんなことできんの、どこぞの將軍様みたいじゃん」

前世のテレビニュースでよく登場した北の將軍様の顔を思い浮かべながら、心のなかでそう呟くタクミ。だが、タクミは將軍様みたいな外道ではないので、彼女らを無理やり手籠めにしようなどは考えていないが。

「ち・な・み・にだ。彼女の名前はなんていうの？」

吹きこぼした紅茶を、バトレーから渡されたハンカチで拭き取りながら、そう質問するタクミ。

「彼女……いえ、彼女たちに名前はありません」

「え？」

名前がないという言葉聞き驚くタクミ。

それをよそに、バトレーは言葉を続ける。

「タクミ様に名前をつけてもらったのは、私と数名だけです」

そういえば、そうだったな、とタクミは思い返した。

召喚した兵士やメイドたちをまとめるために、何人かのフィギュアには名前をつけていたのだ。

「そんな……君たちで名前をつけられないの？」

「はい。残念ながら、我々では名前をつけることはできません」

そう言ったバトレーの瞳は少し悲しそうであった。

「――これは僕が悪いな。もう前の世界じゃない、作って終わりじゃないんだ。僕にとって彼ら彼女らは、大切な仲間であり、家族だ」

タクミは周囲にいるメイドや兵士を眺めながら、自らの意識の低さ

を痛感し反省した。そして「よし」と一言呟くと、バトレーの顔を見る。

「バトレー、みんなをここに呼んで」

「え、畏まりました」

主人の言葉に一瞬驚くバトレーだったが、すぐに周囲にいる者たちを集合させた。

自分たちの創造主であるタクミが呼んでいるという言葉聞いた兵士やメイドはすぐに集合した。

「自分で召喚しといてなんだけど、やつばすごいね」

目の前で綺麗に整列している兵士やメイドを見ながら、タクミは感嘆の声をもらす。自分が製作した模型やフィギュアが意思を持ち、普通の人間と同じように行動しているのだ。感動せずにはいられないだろうか。

「これも閣下のおかげですな」

タクミは声の主の方へ向く。

視線の先にいたのは、ウッドランドパターンのMARPAT（米海兵隊迷彩戦闘服）を着用したアメリカ軍人が立っていた。もとはタクミが製作したフィギュアの一人だが、目の前にいるのは、まさに叩き上げの軍人と言っても過言ではなかった。

軍服の襟に縫ってある星が一つなので、米海兵隊の階級では「准将」だ。

「申し訳ありません、ハメル准将。突然集合掛けたりして」

「お気になさらず。閣下。お呼びとあれば、我々はいつでもどこへでも駆け付けます」

フランク・ハメル海兵隊准将はそう言って笑みを浮かべる。

ハメル准将は1996年公開のアメリカのアクション映画『ザ・ロック』に登場したエド・ハリスが演じたキャラクターである。映画のなかでの彼の武勲は凄まじい。地獄のベトナム戦争で最高の指揮官と称えられ、名誉勲章を生き受賞した数少ない人物で、作中では敵でありながらも、人格者として観客の共感を得た。ベトナム戦争終結後、カンボジア内戦や湾岸戦争の他、非合法の軍事作戦の指揮を多

数経験。しかし、兵の命と名誉を蔑ろにする政府に反旗を翻し、猛毒のVXガスを強奪。アルカトラス刑務所を占拠したものの、最後は部下の裏切りで非業の死を遂げた。

米海兵隊武装偵察部隊通称フォースリーコン出身。

「いや、ネット通販の安売りで購入したけど、やっぱ迫力ありすぎだろ」

タクミは内心ヒヤヒヤしながら、ハメル准将と会話を続ける。いくら自分が製作したファイギュアとはいえ、発しているオーラはまさに歴戦の軍人である。なので基本丁寧語で話す。

「だけど、大丈夫ですか？」

「ん？ 何がですか？」

「いえ、召喚した兵士たちを纏めたりするの？ いろんな国籍の兵士たちなんで」

目の前に整列しているのは、全てタクミが製作し、実体化したフュギュアたちだ。

「いえいえ、閣下に召喚された者たちは皆、優秀で助かってますよ」

「そうですか。それはよかったです」

そんなことを話していると、二人のもとにバトレーが歩いてきた。

バトレーがタクミに集合完了を報告する。そして、タクミがお立ち台に上がり、ハメル准将が大声で「気おつけっ！」と号令をかける。『カツッ！』と踵を合わせる音が響く。

タクミは、皆の視線が自分に向けられていることに緊張するが、緊張をほぐすために咳払いをする。

「みんな、突然の集合の呼びかけに集まってくれてありがとう。集まってもらったのは、皆に“名前”を授けたいと思ったからだ」

その言葉を聞き、兵士やメイドたちが「オオー！」という喜びの声を上げた。

名前をつけて貰えることがよほど嬉しいようだ。

「ではさっそく、名前をつけていこうと思う」

タクミがそう言い終えると、バトレーが順番に番号を呼んでいく。一番最初にやってきたのは、タクミが気になっていたメイドだっ

た。

「(うくん、どんな名前がいいかな)」

メイドの顔をじっと見つめながら、タクミは考える。

顔を見つめられていることが恥ずかしいのか、メイドは頬を紅くする。

「よし！ 君の名前は『カリーノ』だ。これからよろしく、カリーノ」

「はい！ ありがとうございます。主人様！」

カリーノへイタリア語：かわいい〜と名付けられたメイドは喜びの声を上げる。名前をつけられたことがよほど嬉しいのか、カリーノの瞳は潤んでいた。

タクミは右手を差し出す。

「え？ あ、あの……！」

自分の主人から突然差し出された右手を見ながら、カリーノは戸惑いの声を上げる。

「握手だよ」

「はい！ ありがとうございます」

そう言っつて、カリーノはタクミの右手を両手で掴み握手をする。そして手を離すと掴んだ両手を胸元でギュッと握り締めた。

彼女の今の姿はまるで、大好きなアイドルをまじかで見ただけの熱烈なフアンのようであった。

「(え！ ただ握手しただけよ。僕……)」

カリーノのそんな姿に、これまで女子と交流したことがないタクミはドギマギする。

その後も次々に兵士やメイドに名前をつけていくが、名前をつけてもらうたびに、彼らは大喜びするのであった。

第3話 森ではなく『島』、その名も『シルトクレーテ島』

第3話 森ではなく、『島』!? その名も『シルトクレーテ島』

メイドと兵士たちに名前をつけ終わったタクミはハメル准将から報告を受けていた。

紅茶を一口含んだタクミはティーカップをテーブルに置くと、目の前に座るハメル准将に問いかけた。

「では、ハメル准将。ここは森ではなく、『島』だと?」

「ええ、閣下。先ほど行ったドローンによる上空偵察の結果、現在我々がいるのは『島』であることが判明しました。こちらが上空から撮影した写真です」

そう言つてハメルは持参したブリーフケースから茶封筒を取り出してタクミに手渡す。受け取ったタクミは茶封筒のなかから写真を取り出すと、テーブルの上に置き、写真を一枚ずつ確認する。

写真には、それぞれ白い砂浜の海岸、深い緑に覆われた森林地帯、草原、岩山、雪山、古い寺院や遺跡などが写っていた。

「島か……ん? 寺院や遺跡なども写っていますが? もしかして人がいるんですか?」

写真を確認している中で、寺院や遺跡などの建築物があることに気づいたタクミは、そう問いかける。

「はっ、ドローンによる上空偵察では確認できませんでした。しかし地上部隊による島内の探索でも、現時点で我々以外の人間もしくはそれ以外の生物との接触はありません。まあ、今のところですが」

「そうですか……」

ハメルの報告を聞いたタクミはそう言つて椅子の背もたれに深く座り込み思考する。

ここが島であることが分かり少し安堵する。なぜなら、ここが他国の領土内であった場合、もし発見された時に非常にまずいことになる。小規模とはいえこれほどの軍事力を持つ武装集団だ。最悪の場

合、戦闘状態となり甚大な被害が発生する。

「だけど、他国の領海内の島である可能性もなきにしもあらずだね。

……それに、僕たち以外に人がいる可能性があるからね」

だが安心はできない。たとえ無人島であったとしてもこの海域がどこかの国の離島という可能性もある。それに島内には古い寺院や遺跡群が存在するということは、人間がいる可能性がある。様々なことを考えていると目の前のハメルが声を発した。

「もし戦闘となれば、我々は持てる全ての戦力で応戦するだけであり
ます。閣下」

「現在の戦力で対応可能ですか？ 准将？」

タクミの問いかけに対し、ハメルはいかにも軍人という感じで、脚色せず淡々と現在の戦力について語り出した。

「ええ、閣下。現状の戦力では非常に厳しいでしょう。兵員、武器装備、施設などが足りませんので、戦力の増強を要望します」

「具体的にはどの程度ですか？ 准将」

「詳しくはこちらに記載しております。閣下」

そう言ってハメルは持参したブリーフケースのなかから、自分の要望を記載した用紙を手渡した。

記載された用紙の内容を、タクミはブツブツ言いながら確認している。

「パトリオット防空システムに、対艦ミサイル……それに機甲戦力を含めた地上部隊の拡大、AH-64Dアパッチ攻撃ヘリなどの航空戦力……周辺海域警戒用の哨戒艇、司令部を含めた各種地上施設……ちよつと時間がかかりますよ、これ？ あと要望の兵器によつては、米国以外の兵器になりますか？ それでもいいですか？ 准将」

戦争を起こせるほどの戦力の要望に、タクミは表情を引き攣らせながらそう問いかける。

所持しているプラモデルやフギュアによつては米国やロシア、中国、日本などの兵器で代用しなければならないことをタクミは伝える。すると、ハメルは微笑むと「ええ、それで構いません」と答えた。その言葉を聞いたタクミは大きく背伸びをする。

「それじゃ、さっそくはじめるか」

すぐに製作に取り掛かるため、タクミが立ち上がろうとすると、傍に控えていたバトラーが声をかけた。

「ご主人様、製作の前に気分転換に行いませんか？」

「ん？ いいけど……どこか行くの？」

バトラーは顎に手を当て考えると、「そうですね。海を見に行きませんか？」と言った。

「海？ 別にいいけど」

敬愛する主人からの了解を得たバトラーはすぐに移動するため、護衛の兵士たちに車両を手配するよう伝える。

「そうだ。せっかくだし、ハメル准将も行きませんか？」

「よろしいのですか？ 閣下」

「ええ、いいですよ。准将もこの二日、働き詰めでしょう？」

タクミに召喚されてからの二日間、兵士たちの指揮に島内の探索、主人であるタクミの警護計画の作成などでハメルはずっと働き詰めだった。いくら元がプラスチックのフィギュアで食事も睡眠も不要な体だとしても、すでに意志を持って行動している分、精神のリフレッシュは必要だろうと考えたタクミはハメルも誘う。

自らの主人の誘いにハメルは笑みを浮かべると、「では、ご一緒させていただきますか。閣下」

ハメルと話をしていると、執事のバトラーが戻ってきた。

「ご主人様、車両が到着しました」

「うん。ありがとう、バトラー」

タクミがそう答えると、三人は揃って車両に向かって歩き出した。小道の先にはOD色のハンヴィー三台が停車していた。三台とも地域紛争用に装甲強化されたM1114装甲強化型で、前後の二台のルーフトップには12.7mmM2機関銃が搭載されている。

ハンヴィーの周囲で警戒していた海兵隊員一名が歩いてきた。

「閣下、お待ちせしました」

「突然のことで申し訳ないね」

「お気になさらず閣下。お呼びとあらばいつでも」と海兵は笑みを浮

かべる。

「では、行きましようか。ハメル准将、バトレー」

「はっ！（畏まりました）」

三人は中央のハンビーに乗り込む。

タクミが乗り込む前にバトレーが、さっと後部座席の扉を開ける。

「ご主人様どうぞ」

「ありがとう。バトレー」

フレームで頭をぶつけないように乗り込むタクミ。そしてその隣にバトレーが座る。ハメルは助手席に座った。

三人が乗り込んだ直後、周辺で警戒していた海兵隊員も前後のハンビーに乗り込む。タクミはフロントガラスから前方のハンビーの銃塔に設置されているM2重機関銃に海兵隊員が配置につくのが見えた。

「閣下、発進します」

「了解です」

助手席に座るハメルが振り向き、後部座席に座るタクミにそう伝える。そしてタクミの返事を聞くと運転手に「出せ」と命令する。それを合図に車列はゆっくり目的地である砂浜へ向けて進みだした。

三台のハンビーは、生い茂った樹木の枝葉によって作られた緑のトンネル道を進んでいく。道と言っても、車両が通った轍であるが。道幅は片側一車線ほどの広さがある。

タクミは車窓から外の景色を眺める。

視線の先には手付かずの自然が存在した。人間の手がまったくついていない剥き出しの自然そのままである森は、植物が陽の光を奪い合った結果、このような世界を創り上げていた。

前世で周囲を山に囲まれた地方の高校に通っていたタクミは、今日の前に広がる自然の光景に少しかだけ感動を覚える。ふと、森のなかに兵士の一団がいるのを目にした。緑のベレー帽を被り、背中にはベルゲン・リュックを背負った英国海兵隊コマンドの兵士たちだ。彼ら

は、M1A1トンプソン短機関銃や弾倉給弾式ブレンガンなどの銃器を手に森のなかをパトロールしていた。彼らもまた、タクミによつて実体化された模型兵士たちだ。

車列の先に停車中の装甲兵員輸送車二台がいた。車両は第二次大戦のドイツ国防軍で多数運用されたSd kf z 251だ。もとは、1／700シリーズ第二次大戦ドイツ軍用車両セットに入っていたもので、召喚した時に何故か、MP40、MG34、STG44で武装したドイツ軍歩兵部隊も一緒に現れた。

先導していたハンビーが減速する。そして完全に停車すると、警戒中のドイツ兵の一団のなかから、将校らしき人物がハンビーの運転席に近づき、運転手から話を聞く。しばらくすると、将校は敬礼し、車列を通すよう、兵士たちに命令する。

タクミの乗ったハンビーが通りすぎる瞬間、兵士たちは捧げ銃の姿勢で見送った。おそらく、真ん中のハンビーにタクミが乗っていることを聞いたのだろう。

「そこまでしなくていいのに……」

窓から兵士たちの姿を見たタクミがそう呟くと、隣に座っていた執事のバトレーがその呟きに答えた。

「それほどまでに主様の存在は、我々にとって大切なのですよ」

「そうかなあ？　自分では全然そうは思わないけど？」

「主様は我々が唯一忠誠を捧げることができお方なのです。そして主様は我々に唯一命令を下すことができるお方で、その偉大なお力を持って模型であった我々に命を授けて下さった。まさにイエスであり、アツラーであり、ヤーハウエであります。そのような偉大なる創造主に、尊敬と崇拜の念を捧げない者がおりましようか？　さらに主様は——」

タクミの素晴らしさを語るバトレーの頬が興奮のあまり紅くなり、口調も早口になっていく。バトレーの変貌ぶりを目にし、タクミは頬を引き攣らせる。

「(おいおい、なんかさつきと違うぞっ!!) うん、じゅ……十分わかったよバトレー、ありがとう」

「え？　そうですか？……畏まりました主様」

タクミの言葉を聞いたバトラーは、まだ喋りたりないとも言うような表情をする。

そんなこんなで車列は緑の天蓋を抜け、白い砂浜とエメラルド色の海の美しい海岸に到着した。まるでリゾート地のような海岸を目にし、タクミは「オオ〜」と感嘆の声をあげた。そして、外に出ようとドアを開けようとしたが、バトラーに止められる。

「お待ちください。主様」

「なんだい？　バトラー」

「まずは警護の兵士たちが周囲の安全を確保しますので、少々お待ちください」

「え〜！　いいよ別に、この島には僕たちしかないよ」

早く外に出たいタクミは文句を言うが、バトラー「駄目です」と言って首を横に振る。

前後のハンビーから護衛の兵士たちが降り、素早く周囲に展開する。

「まだこの島は無人島と決まったわけではございません。兵士たちによる島内の探索は継続中です。どこかに誰かが潜んでいるかもしれません」

「ハア〜、わかったよバトラー」

タクミは溜息を吐くと、ハンビーの窓から砂浜を眺める。

バトラーは忠実な執事である、常に主人であるタクミの側に控え共に行動する。この二日間で分かったことだが、バトラーは何をさせても完璧にこなす超人のような男だ。炊事洗濯は完璧、料理に至っては和洋中間わず最高の腕前だ。そして驚異的な戦闘能力を持つ（世界中の銃器やナイフを自分の手足のように使う）。そのように完璧なバトラーだが、決してそれを鼻にかけたりはせず、主人であるタクミはもちろん、他のメイドや兵士たちに対しても礼儀正しく応対する。そして問題があれば共に考え、最善の解決策をタクミに提示する。

「(いろいろと僕のことを考えて行動してくれているのは分かっているんだけどなあ〜)」

そんな超絶最強執事バトレーにも、一つだけ欠点がある。それはタクミに対して異常なほど過保護な、いや『狂愛』とでもいうぐらいの忠誠心の高さである。例えば模型を製作している時にうっかり工具で指を切ってしまった時は、血が滴るタクミの指を舐めようとしたり、タクミが風呂に入ろうとすると「私もご一緒に」などと言いながら服を脱ぎ出したりするのだ。流石に面食らったタクミは

慌ててやめさせ、「これからはキャンピングカーの中には入るな」と厳命した。それを聞いたバトレーは、『主人を不快にさせるとは、執事失格です!』と言った瞬間、懐から取り出したナイフで自決しようとしたので、慌てて辞めせた。

「(バトレーつてもしかして、ゲイなのか? 自分で作っておいてなんだが、なんでこうなるかねえ)」

なんでこんな性格なのかと、彼の創造主であるタクミは心のなかで自問していると、車内無線機に兵士たちからの「クリア」と報告が入った。どうやら安全が確保できたようだ。

助手席に座るハメルが後部座席に振り返り、人のいい笑みを浮かべ「準備ができました。閣下」と言った。

「了解。では行きますかね」

タクミは外に出ると、大きく深呼吸をして、漂う潮の香りを肺一杯に吸い込む。そして吐き出しながら周囲をぐるっと見回す。

視線の先には、果てしなく広がる大海原と白い砂浜、そして雲一つない青空というまるで観光雑誌の一面を飾るような美しい光景が広がっていた。耳には砂浜に打ち寄せる小波が響く。

「いいねえ、気持ちが悪くなく」

「それは良かったです。主様」

主人の感想を聞き、バトレーは笑みを浮かべながらそう答える。

ふと、タクミは砂浜に一匹の海亀がいるのを見つけた。

「お、海亀じゃん」

「産卵でしょうか?」

タクミの言葉を聞いたバトレーが、砂浜をせつせとほっている海亀

を見ながらそう口にする。

「あー！ そういえばこの島の名前決めてなかったね」

ふと、タクミは、島に名前をつけていなかったことに気づきそう問いかける。うしろに控える二人も思い出したように「嗚呼、そうでしたね」と言う。

「この広い海の先には、もしかしたら僕たちの知らない国や文化、それに人々がいるかもしれない。いずれはその人たちと交流しないといけないから、僕たちもちゃんとした名前をつけないといけないよね」「そうですね。この世界における閣下と我らの拠点となる島です。しっかりと名前が必要かと、私も思います」

軍事の最高責任者であるハメルの言葉を聞いたタクミは頷くと、腕組みしながら島の名前を考える。

「(うーん。どんな名前が良いかな？ 亀は英語でタートル……タートルアイランド？ なんか違うなあ、かっこいい名前は……お！ そうだ！)」

島の名前としてふさわしい名前が考えついたタクミは、うしろの二人に振り返る。

「決まったよ。この島の名前は『シルトクレーテ島〈独語・亀〉』にする」

「ドイツ語ですか。主様は外国語に関する知識をお持ちのようですね。このバトラー感服致しました」

島の名前を聞いたバトラーはそう言っ、感嘆の声を上げる。

照れ隠しのため、タクミは首筋をかきながら言葉を続ける。

「いやあ、昔見たアニメにドイツ語を喋るキャラクターがいてね。その所為で一時期、ドイツ語や他の外国語に興味を持ってね。それでふと思いついたのさ！」

アニメに登場した戦争狂の大隊指揮官の姿を脳裏に浮かべながら、「むふふ」と胸をはるタクミ。全く役に立たないと思っていたオタク知識が意外なところで生かされたことに喜ぶ。

「それでどうかな？ 二人とも」

タクミの問いかけを聞いたバトラーとハメルは、「異論ありません」

と口を揃えて答える。

「そんじや、シルトクレーテ島の開発をしていきますかね。頑張るぞお〜！」

前世でジオラマ製作や箱庭ゲームを数多くやってきたタクミは、興奮を隠しきれず拳を高高く突き上げる。

自分たちの創造主であるタクミの、そんなあどけない姿をうしろから見ているハメルとバトレーは微笑む。

その後、3人は早速、島の開発に取り組んでいくのであった。

日本帝国・神戸港へ1995年4月15日

日本帝国の第一帝都に本社がある海運会社。帝国海運の社員である小川和正へおがわかずまさは、貨物船秋津丸へあきつ丸の上甲板から神戸港を眺めながらタバコを燻らせていた。深夜とはいえ、神戸港の向こうにある街からは、夜の灯が思い思いに煌めき輝いていた。

「ん？」

自分の方に近づいてくる足音に気づき、そちらに視線を向ける。そこにいたのは自分と同じ作業着を着用した後輩の田島がいた。

後輩の姿を見た小川は腕時計をちらつと見ると、苛立つてタバコを口から話す。そして「出港時間をすでに30分は過ぎてる」と不安げにつぶやいた。

「まさか、まだかかる。なんて言わないよな？ 田島よ」

田島は眠たげなどんよりとした眼差しで、先輩のぼやきに軽く首を横にふると、「出港の許可がようやく降りたようですよ。さつき船長たちが言っていました」と答えた。

「そうか……んじや、機関室に行くか」

田島の言葉を聞いた小川はそう言つて、作業着のポケットから取り出した携帯灰皿にタバコを捨てる。そして田島を連れ、船での二人の職場である機関室へ向かう。

「そういや、先輩聞きましたか？」

機関室へ向かう途中、背後を歩いていた田島が声をかけてきた。小

川は立ち止まらず、ぶつきらぼうに聞き返す。

「何をだよ？」

「ええ、なんでも、太平洋に『新しい島』ができたみたいですよ」

「はあ？ 新しい島って、なんだそりゃ？」

馬鹿馬鹿しい、島が突然できる訳ねえだろうが、と心のなかでツツコミを入れる小川。

田島という男は、この貨物船秋津丸のなかで一番若いため、古参の船員たちからよく揶揄われる。本人自身もそれを入っており、食事中や休憩中に冗談や馬鹿話などを話す。いつもの小川ならば冗談の一つくらい返すが、なにぶん今はこれから機関室で行う作業手順を寝不足で鉛のように重くなった脳みそで必死に思い返していたので、右から左へ聞き流していた。

「大きな島と小さな島で構成されていて、だいたい……面積が併せて約2000平方キロメートルの大きさらしいです」

「何寝ぼけたこと言ってるやがる。島が突然できる訳ねえだろうがよ」
自分の言ったことが寝言だと思われることに田島は、「ムッ」とする。

「本当なんですって、船長たちがそう言ったのを聞いたんです」

「はいはい、わかったわかった。ほら、俺たちの職場についたぞ」

機関室に到着した小川は、そう言って田島の方に振り返る。

「休憩中聞いてやっから、さっさと中入れ、すぐに始動始めるぞ」

小川の言葉を聞いた田島は「絶対ですよ！」と言いながら、機関室に入っていく。そんな後輩の姿を見た小川は、やれやれと肩をすくめ自分も中に入っていく。

それからまもなく、貨物船秋津丸は、太平洋に建設された食糧生成プラントに向けて出港した。

第4話 魔窟

第4話 魔窟

アメリカ合衆国・ホワイトハウスへ1995年4月18日ワシントンDCへ

ホワイトハウス―その威風堂々たる白亜の建物の中では、合衆国大統領を中心とした政府によって、日々多くの国内外の問題に対してのアメリカ政府の立場を決定している。そこで決定されたことは国内だけでなく、世界の政治経済、軍事戦略に多大な影響を及ぼす。―まさに超大国アメリカを象徴する存在である。

アフリカ系アメリカ人として、初の下院議長を務めるアーサー・トランブルは、ホワイトハウス西棟にある大統領執務室のソファ―に腰を下ろし、ジョン・レーガン大統領とジェイク・カールツチ国家安全保障担当官と会談を行っていた。

執務室の中は、暖かな春の陽気が窓から差し込み、本来であれば和やかな気持ちになるはずだが、室内には殺伐とした雰囲気漂っていた。

「カールツチ補佐官、ご説明いただけますかな？」

アーサーは、机を挟んで座るジェイクに、現在アメリカが直面する安全保障上の『脅威』についての説明を求めた。大学で政治学と国際関係学を修め、若くして国防及び外交における安全保障担当官を務めるジェイクは、気持ちを落ち着けるために小さく深呼吸すると、『脅威』についての説明を開始した。

「三日前のことです。軍の偵察衛星が太平洋上に約2000平方キロメートルの面積を持つ群島を発見しました。これがその島の写真です」

ジェイクは持参していたブリーフケースから茶色のレターケースに挟まれた写真と資料をトランブルに手渡す。アーサーはスーツの内ポケットから愛用の老眼鏡を取り出し、写真に写っている島嶼及び情報部が作成した資料を確認する。

そして、情報を全て脳に刷り込むかのように、ブツブツと資料に書

かかれている情報を読み上げる。

「島の内陸部には広大な森林と湖……『地球と同じ文化歴史背景を持つとされる遺跡が確認される』か」

「問題なのは、その次の資料に記載された内容です」

そう言われ、資料をめくるとそこに記載された情報と添付された偵察写真を見て、アーサーは強い衝撃を受けた。そしてゆっくりと資料から目を離し、「……これは事実かね？」と一言発した。

「ええ……そこに記載されている内容に間違いはありません。トランブル議長」

アーサーのその一言にジェイクがそう答えた後、中央の肘掛け椅子に座っていた大統領のジョンが「アーサー」と声をかけた。……大統領を務めるジョンは、ホワイトハウス内で声をかけるとき、親しみやすいようにファーストネームで声をかける。

自身の名を呼ばれたアーサーは、ジョンに視線を向けた。

大統領を務めるジョン・レーガンは、大統領のなかで歴代3位の69歳という年齢で大統領に就任したが、少しもそれを感じさせない、はつきりとした口調で語り出した。

「驚くのも無理はない。私も最初に『それ』を見た時は、我が目を疑ったよ……発見からわずか、24時間で島の各所に空港や港、それに居住区と思われる建造物。そして、『ミサイル』が配備されていたんだからね」

ジョンの言葉を聞いたアーサーは、再び資料に目をやった。添付された偵察写真には、おそらく情報部の分析官が書き込んだのであろうか、赤ペンでいくつも囲まれた箇所があった。不鮮明だが、空港や港、居住施設、そして大型のトレーラーに積載されたミサイルらしき兵器と、それを補助する通信車両や管制制御車両などが確認できた。

「偵察衛星を含む警戒監視網と、CIAと軍情報部の情報網に少しも引つかからずに、このような大それたことをできる国が、この世界に存在するかね？ ソ連は国土の大半をBETAによって失い、アラスカに避難、今や隣人も同然。欧州も同じく英国以外は、アフリカなどの旧植民地国やグリーンランドに退避している。アジアも似たよう

なものだ」

ジョンは話のなかで、若き日に俳優として活躍したためか、よくユーモアや韻を混ぜたりする。ジョンの話をそこまで聞いたアーサーは、ジョンに問いかけた。

「各国はなんと？ 仮にもこれほどの軍装備品を保有する組織です。ひとつの組織……いや、組織ではなく国家規模の支援がなければ無理なはず」

すっかり緩くなった紅茶で喉を潤していたジョンは、目でジェイクに合図をする。「あつ、はい……」とジェイクは返事をする、ブリーフケースから報告書を取りだし、読み上げる。

「えー、国務省や国防総省、それにCIAやNSAなどの公式非公式問わず、さまざまなラインで各国の政府、軍関係者に確認をしましたが、いずれも関与を否定。逆にこちらに聞いてくる有様です」

「そうか……」

「ーまあ、仮に関与があったとしても、正直に認めること絶対にある得ないでしょう。一応テロの可能性も考え、CIAとNSAが海外の政治的もしくは宗教的な過激思想を掲げる組織を、FBIが国内の急進的な宗教カルトや環境保護団体などの組織や個人を調査しましたが、どの組織もこのような事を起こせるような組織力も資金力もありませんでした」

説明を終えたジェイクは、まるで、お手上げです、というように軽く肩をすくめた。そして紅茶を飲み終えたジョンが、ティーカップをテーブルに置き、今後の動きについてアーサーに説明を始めた。

「すでにパールハーバーの海軍基地から、第7艦隊所属の第9空母戦闘群を周辺海域の海上封鎖のために出撃させた」

「海上封鎖……しかし、それは性急すぎるのでは？ 私は、あまり良い方法とは思えません。まずは海上からの警戒監視と情報収集を実施すべきです。もし相手が我々のハッター、『ー誰が、ハッターだと？』!？」

大統領ジョンの言葉に、アーサーは一瞬、言葉を詰まらせる。

「アーサー、我々合衆国は自由主義世界の指導者として、それを信奉す

る政府とその国民を守護する義務があるのだ。現在、終わりの見えな
いBETAとの戦いに有効的な解決策を見出せない各国政府に対し
て、キリスト教恭順派などによるテロ攻撃が頻発している。卑劣なテ
ロリズムには断固とした態度で、それに「ふさわしい対応」を世界に
示すことで、悪意あるものたちへの牽制になるのだ」

ジョンは、まるでヒーロー映画の主人公のような口調で、そう語る
が、かつて弁護士として多くの訴訟に関わってきたアーサーは論理的
に、そして冷静に反論する

「大統領が仰ることの意味は十分わかります。その「ふさわしい対応
」を取るためにも、まずは情報収集活動及び各国政府、国連との情報
共有を行うことが大切では？ ですので、私は現状、相手を過度に刺
激する行動は「ふさわしい対応」とは思えない、と愚考します」

「アーサー……世界はいま、混沌としているのだ。すでに我が国を含
め多くの国で、現状に不満を持つ「難民や市民」による犯罪や暴動が
起こっている。ここで秩序を失えば、世界は崩壊する」

大統領のその言葉を聞いたアーサーは、難民や市民を、暴徒や犯罪
者と同一視しているジョンの姿勢に怒りを感じ、拳を強く握り締め
る。そして、キツパリと言いつ切る。

「大統領、市民や難民を、犯罪者や暴徒などと同一視するそのお考えは
お辞めください。それは危険な考えです」

アーサーのその言葉に、ジョンはまるで、しまった、とでもいうよ
うに手を顔に当てる。

「すまない、少し熱くなっていたようだ。申し訳ない、アーサー」

「いえ……大統領」

しばしの沈黙に支配される室内だったが、意外にもその沈黙を破つ
たのは補佐官のジェイクであった。

「お二人とも少々、話が脱線しているよ……大統領、私の方からトラ
ブル議長に説明を行っても？」

「ああ……頼むよ。ジェイク、では私は先にシチュエーションルーム
に向かうことにするよ」

ジョンはそう言つて、席を立ち上がると、警護官に連れられ、地下

のシチュエーションルームへ向かった。

アーサーは、政府の今後の方針と議会対応についての説明を受けた。

〈ホワイトハウス西棟・閣議室〉

アーサーへの説明を終えたジェイクが、閣議室に入るとなかにはジョンが、備え付けの窓から外を眺めていた。ちなみに室内は二人だけである。

気配を感じたのか、ジョンは振り向かずし声をかける。

「それで、アーサーはなんと行ってきたのかね？」

「ええ、〃できる限り協力はする〃と」

その言葉を聞いたジョンは、「フン」と鼻を鳴らす。

「〃できる限り〃ねえ。それで、何を要望してきた？」

「〃対策会議に参加させる〃と、ホワイトハウスと議会の緊密な連携のためにと」

「おいおい、それは困るねえ。だいたい下院議長にそんな権利はないだろう？」

現在対策会議はホワイトハウス西棟の地下にある広さ513・2平方メートルの会議室と情報管理センター機能を備える地下施設で行われている。メンバーは大統領を含むホワイトハウス高官、軍トップの統合参謀本部議長、CIA長官などで、本来下院議長は含まれていない。

「もちろん、安全保障上の理由から拒否の意思を伝えましたが……」

「のらりくらりとかわされた、と？」

「ええ、申し訳ありません。大統領」

ジェイクは申し訳なく顔を俯かせる。しかし、ジョンは振り向くと、若いジェイクの肩に手を添えて励ます。

「そう気を落とすことはないさ、あの男をコントロールできる者などいないよ。まあ、いざとなったら、〃この情報〃で取引するしかないね」

そう言つて、ジョンがスーツの内ポケットから取り出したのは、一

枚の写真だった。写真には島の内陸部で建設作業に従事している
戦術機らしき、機体が写っていた。

「それにしても、どこの機体だろうか？……実に興味深いね」

「我が国や諸外国が運用する戦術機とは、似ても似つかない姿ですね。まあ、研究途中もしくは退役したものが横流しされたとも考えられませんが」

ジェイクの言葉を、ジョンは笑いながら否定する。そしてぎつと自分なりの分析を語り始めた。その姿はまるで新しいおもちゃを見つけた子供のようである。

「ハッハッハッ……まさか、素人の私でもわかる。これは明らかに別物だよ。装備する火器も、現行の36mmや120mmと比べて明らかに高火力だ。そんな代物を開発できる技術や人的資源は残念ながら、我が国を含め諸外国にもないだろう」

「まさか、そんなことは……！」

国家安全保障担当補佐官として、日々、国防や外交に関する情報に接しているジェイクは分析に驚きの声を上げる。

BETAによって領土と国民、そして経済活動に必要な産業基盤の大半を喪失した欧州やソ連は確かにそうだろう。唯一考えられる国として、日本が考えられるが、政財界のほとんどのCIAの協力者がいるため、何かしらの動きがあればすぐに分かる。

「ーきて、話は変わるが。以前君に頼んだ『日本人形』は見つかったかね？」

「時間が少しかかりましたが、お探しの日本人形はすでに『出荷』され、お孫さんの『誕生日』には届くかと」

その言葉を聞いたジョンは笑みを浮かべ頷く。

「それでー店主はなんか言ってたかね？」

ジョンの問いに対して、ジェイクは笑みを浮かべながら答えた。しかし、その笑みからは『人間の暖かさ』が感じられなかった。

「ーええ、店主曰く『この度で閉店することになったので、代金は結構』とのことでした」

「そうか……それはとても残念だ」

「ええ、本当に」

その後、二人は揃ってホワイトハウス地下のシチュエーションルームへ向かっていくのであった……。

第5話 報告会

第5話 報告会

〈北太平洋海中 1995年4月23日〉

約1億555万7千平方キロメートルの面積を持つ海、太平洋。その太平洋は赤道によって北と南に分けられるが、俗に北太平洋と呼ばれる海域の海面下200メートルの海中を一隻の潜水艦が悠然と進んでいた。

USSフロリダ(SSGN-728)は、オハイオ級原子力潜水艦の4番艦として、本来、大陸間弾道ミサイルであるトライデントSLBMシステムを搭載していた。しかし、冷戦終結後に締結された核軍縮条約によって、それまで24基あったICBM発射筒の代わりに、22基のトマホーク巡航ミサイル発射筒と潜航状態において、ダイバーの出入艦を可能にするエアロック及び小型潜水艇の格納庫通称DDSS(ドライデツキシエルター)を搭載した巡航ミサイル潜水艦(SSGN)に改造された。

4層構造の艦内では、合計159名の乗組員達がそれぞれの持ち場で配置に就いていた。その潜水艦の頭脳といえる最上部中央の司令室では、米海軍の綿製の紺のつなぎに身を包んだ艦長と副長の2名がフロリダの今後の行動について話し合っていた。二人の周囲では乗員達が最新鋭の精密機器と共に艦内の任務についていた。

フロリダの艦長でタクミから「ダドリー・モートン」と名付けられたモートン艦長は、机を挟んで自分と向かい合う副長の「リチャード・オカーンに「副長、我が艦の現在位置は？」と問いかけた。

「ハッ、本艦は速力20ノットで航行中です。現在位置はこのあたりです」

そう言つて、副長のリチャードは海図を指差す。

「フム。ミッドウェー諸島の近くか……まさか、我々がいるのが『地球』とはね」

「これまでに収集した情報から考えて、地球で間違いないかと。……収集した情報は、すでに司令部へ報告済みです」

リチャードの言葉を聞いたモートンは、仕事が早いな、と心の中で褒める。

二人が指揮するこのUSSフロリダは、もとは1/350スケールの潜水艦プラモデルであったが、ハメルの要望を受けたタクミによって、製作実体化。現在は本拠地であるシルトクレーテ島がある北太平洋での哨戒任務に就いていた。

リチャードの説明を聞いたモートンは頷くと、手にしていた報告書を確認しながら話を続ける。

「しかし、閣下の転生先が地球とは。ーしかしかも平和とは程遠いエイリアンとの戦争真っ只中。この報告書を読んだ時にはひどい冗談かと思ったが、これを見たらそうも言えなくなった。」

そう言つてモートンは報告書に添付された衛星写真を見つめる。写真には禍々しい外見をし、見る者に嫌悪感を抱かせる多数の生物が土埃を巻き上げながら、地上を疾走していた。

「その衛星写真を確認した閣下曰く、そのエイリアンはこの世界では『BETA（人類に敵対的な地球外起源種）』というらしく、1973年に中国のカシュガルに最初の降下ユニットが着陸して以来、人類はBETAとの絶望的な全面戦争を続けているそうです。ちなみその写真の場所は、中国のかつての首都であった北京です」

リチャードの説明を聞いたモートンは目を細め、もう一枚の写真を見る。その写真にはまるでSF映画に登場しそうな人型ロボットが写っている。

「そのBETAに人類が唯一対抗できる兵器というのが、この戦術機と呼ばれる人型ロボットか。まるでSF映画の世界だな……」

「偵察写真を最初見た閣下はすっ転んで、大声で「マブラブかあああ!!」と叫んだらしいですよ」

「ほう、それは私も見たかったな。ーん？　なんだそのマブラブとこののは？」

「はい。閣下が前いた世界の日本で、昔放送されていたロボットアニメのタイトルらしいです。正式タイトルは『マブラブオルタネイティブ』です。先ほど送られた資料も、閣下から提供された『マブラブ公

式設定資料』を元に司令部が作成した物です」

このリチャードの言うとおり、執務室でせつせとプラモを製作していたタクミはこの事をバトレーから聞いた瞬間、絶叫しながら椅子から転げ落ちた。そして慌てて幹部たちを招集すると、コミュ障ながらも公式設定資料片手に自分たちがいる世界と取り巻く情勢を事細かく説明した。

事態の深刻さを理解した幹部たちはすぐさま対BETA戦に向けた戦術及び戦略の策定に取り掛かり、作戦行動中の全部隊にも情報が共有された。

「オルタネイティブ『二者択一』か……ふ、皮肉だな。我々には戦うか、滅びるかのどちらかの選択肢しか存在しないという事か……」

「……1995年現在、これまでのBETA侵攻によって、ユーラシア大陸はほぼ失陥。戦線はすでに朝鮮半島北部まで後退しています。報告書では2年後の1997年には朝鮮半島が陥落、そして対馬海峡を渡って来たBETAによる日本侵攻が開始されると書かれています。」

いつの間にか二人の会話に聞き耳を立てていた乗員達は必死に冷静さを保ってはいるが、動揺を隠しきれない何人かの兵士達は顔を俯かせている。彼らも数時間前の艦内ミーティングで説明を受けていたが、副長の言葉を聞き改めて自分達が置かれている状況の悲惨さを実感する。

BETAの中にはレーザー級なる生物がおり、それから発せられたレーザーによって飛行機やミサイルなどの航空兵器が無力化されているのだ。

重苦しい空気に包まれた司令室だったが、それを破ったのは他でもない艦長であるモートンだった。

「我々は軍人だ。戦わず敵に降伏しはしない……それに我々には閣下という強い味方がいるんだ。副長も見ただろう？ 閣下が作られた『モビルスーツ』を」

「はい。自分も最初にあれを見た時は、とても驚きました。レーザー兵器を装備し、ありとあらゆる環境下でも行動できるという人型機動

兵器。――閣下いわく、この世界の主力兵器である戦術機と比べて、その汎用性、生産性、運用性において雲泥の差がある、と」

出港の前日に彼らはタクミによって建設された海軍基地で、他の兵士たちと共にモビルスーツを初めて目にした。タクミからは「作業及び防衛のために用意した」と言われたが、軍人である彼らはそれを目見て理解した。

――これは我々の常識を覆す存在であり、そしてそれを簡単に作り出せる『タクミ』もまた規格外の存在だと。

「すでに閣下と司令部によって、モビルスーツを軸とした新たな戦術及び部隊の編成が始められている。もちろん海軍に配備される水陸両用モビルスーツ部隊も編成中だ」

「「オオオー！」」

モートンの言葉を聞き、乗員たちは驚きの声を上げる。先ほどまでの重苦しい空気はすでになく、代わりにモビルスーツという物をいとも簡単に作り出したタクミの力に畏怖し、そのような強大な力を持つ人物が自分たちのそばにいる幸運を喜ぶ。

だが喜びに包まれた司令室に、ソナー室からの「感あり」の報告が入る。

「ッ！ 艦長！ ソナーに感あり」

「何、近くか!？」

慌てて報告をした兵士の近くに歩み寄るモートン。

「いえ、本艦よりだいたい離れています」

「艦の種類は？」

「おそらく、大型船舶です。……数は複数です」

「引き続き警戒し、何かあればすぐに報告しろ」

「了解」

ソナー員にそう伝え終えたモートンは元の位置へ戻ると、リチャードが眉をよせ、海図を深刻そうに見つめていた。

「副長、どうした？」

「艦長、その……針路を考えてみたのですが。もしやそいつら、我々の所へ向かっているのでは？」

「ふむ。そうだろうか。おそらく、本島に向かっているのだろう。すぐにこの事を司令部へ報告する」

モートンは向き直ると、司令室内の乗組員達に命令する。

「本艦はこれより、司令部への報告を終えた後、不明船団の追跡任務を開始する」

「了解」

その後、USSフロリダは一気に潜航深度ギリギリまで艦を潜航させると追跡任務を開始した。

〈同日 シルトクレイテ島 タクミ邸〉

タクミは、シルトクレイテ島北部の森林に建設された豪華な邸宅から、広大な自然を見下ろしていた。遠くには太平洋が見える。

手付かずの森に囲まれたこの邸宅は、もともとジオラマの邸宅だったのだが、実体化後に色々と増改築を繰り返した結果、敷地総面積7000ヘクタールという東京山手線の内側より広い大豪邸になってしまった。敷地内にはヘリポートや劇場、使用人達が住む館などがある。

ふと、部屋の扉をノックする音がし、振り返ると執事であるバトルーの声が聞こえた。

「ご主人様、報告会の準備ができました」

「了解。すぐ行くよ」

タクミはそう答えると、部屋の扉を開ける。そこにはいつものようにシワひとつない黒の燕尾服に身を包んだバトルーが笑みを浮かべ立っていた。

「それじゃ、行こうか。バトルー」

「はい。ご主人様」

会議室へ続く廊下を黙って歩く2人。埃一つ落ちていない廊下を歩いていると、前方から1人の女性メイドが歩いてきた。

癖のない金髪を肩口で切り揃えた顔立ちのはつきりとした女性だ。着ているのはメイド服で、エプロン部分が大きくスカート部分は長ら

く落ち着いたもの。

身長は170cmほどで肢体はスラリと伸び、豊かな双丘がメイド服の胸の部分をおしのけんばかりに自己主張していた。

全体の印象としてはお淑やかなメイドだった。

やがて互いの距離が近づくと、前方にいたメイドは通路の隅に寄り、タクミに対して深いお辞儀をした。

タクミはそれに笑顔で応える。

このメイドもタクミによって生み出された女性フィギュアで、この広い屋敷に数多く勤める使用人の1人だ。自分で生み出しておいてなんだが、しげしげとメイドを眺める。

タクミに見つめられメイドは、顔を赤くしながら声を発する。

「あ、あの、タクミ様。私めが何かご無礼を……」

「ん？ ああ……ごめんよ。そうじゃないんだ。君にちよつと見惚れてただけだから、お仕事いつもありがとう。」

タクミの言葉に頬を紅く染めるメイド。そしてすぐに感謝の言葉を述べる。

「……………ありがとうございます、タクミ様」

「うん。それじゃ」

メイドに労いの言葉を掛け、その場を後にするタクミ。しばらくすると、背後を歩くバトラーが声をかけてきた。

「さすがですご主人様です」

「ん？ 何がだい？」

「いえ、あのように労いの言葉を掛ける、そうする事で人心を掌握する。さすがであります。」

どうやら先ほどのメイドとの会話を、人心掌握術か何かと考えていたようだ。

バトラーの言葉を聞いたタクミは「それは違うよ」と答え足を止める。そして廊下の窓に近づき、綺麗に整えられた庭園を眺める。この屋敷の広い庭園にはぶどう、イチジク、アーモンド、アプリコット、オレンジなどの果物の他、チューリップなどの彩り豊かな植物が植えられていた。もちろんタクミが携帯で、種や苗木を召喚して植えた物

だ。

「(植えて一晩でこれほどまで成長するとは。ー本当チートだよ)」
植物を一晩でこれほど実らせる事ができるこの島の土壌が凄いのか、神様に改造され何でも召喚できる携帯電話が凄いのか……。

「(まあ、絶対後者だけど……ん?)」

庭園を眺めながら、そんな事を考えていると屋敷の使用者である庭師たちが剪定用具を手に伸びた枝葉を切り、造園に励んでいた。そのすぐ傍の小道には黒いスーツを着用した複数の警備員が巡回していた。手にはP90を握っている。

「僕はプラモ作りしかできないからね。……だから、その他の事はみんな、彼ら彼女らに任せっぱなし。感謝するのは当然の事だよ」

「……」

「さて、みんなが待っているから急ごう」

タクミはそう言って再び歩き出した。その後ろ姿をバトレーは見つめる。

「(……本当にお優しい人だ。この世界に転生され、まだ日が浅いというのに……皆がご主人様のように分け隔てなく優しくできる人間は少ない。それにまだ16歳。人の上に立つにはあまりにもお若く、そして背負っている物はとても大きい。ーだからこそ私達がお支えしなければ!)」

心の中で固くそう決心するバトレー。すると自分の背後にいない事に気づいたのか、前を歩いていたタクミが振り返り「ちよと、バトレー何やってるの? おいてくよ」と声をかけてきた。

「ハッ! 私とした事が……申し訳ありません、ご主人様」

気を取り直したバトレーは急いで、タクミのもとへ向かう。

会議室に入ると、すでに主だった幹部達は集合していた。

タクミの姿に気づいた幹部達は席から立ち上がり、自分達の主人であるタクミに敬意を示す。その敬意に対して、タクミは恥ずかしさを隠すように頭を掻くと、「どうぞ、座って」と着席を促す。

タクミは上座に設置された肘掛け椅子に座り、バトレーはその側に立ったまま控える。

そして、着席して開口一番、報告会に集まってくれた幹部達に感謝の言葉を述べる。

「今日は皆、忙しい中集まってくれてありがとう」

タクミのその言葉に対して、彼の右斜め前に座るハメルは「いやいや」と言いながら笑みを浮かべる。

「閣下、我らにそのような言葉は不要です。以前申し上げたように、閣下に召喚された我々が、閣下の為に働く事はごく自然な事です」

「それでもですよ、ハメル司令。――僕ってプラモ作りしかできませんので、それ以外の事は、皆に実質丸投げ状態。こういう時しか感謝を言えませんからね」

この一週間でタクミが行った事といえば、司令官のハメルが要望する陸上兵器、航空兵器、海上兵器などのプラモデルを制作し実体化した

事と、執事兼専属秘書であるバトラーが持ってくる各種書類の確認などの簡単な事ばかりだった。組織の編成運用は、ほぼ幹部達を取り仕切ってくれた。

「閣下から感謝の言葉を頂けるだけで、我々の苦労は報われます。本当に……さて、早速説明を始めてもよろしいですか？」

「はい。お願いします」

タクミの言葉を聞いたハメルは会議の進行役を務める将校に頷く。直後、会議室天井のシャンデリアの照明が落とされ、室内は薄暗くなった。

「では報告を始めます。まずはシルトクレーテ島の開発状況について報告します。正面のスクリーンをご覧ください――」

そして、幹部達による報告会は始まった……。

「(それにしても、この世界に転生してから、わずか一週間の間にすごく様変わりしたなあ)」

幹部達の報告を聞きながら、タクミは心の中でそう呟く。

わずかな一週間足らずで、無人島だったシルトクレーテ島は驚愕の変貌を遂げていた。荒地にはアスファルトの道路が敷かれ、海岸には巨大なクレーンをいくつも備えた港、島の内陸部には大小様々な滑走

路を備えた空港などの近代的な島になっていた。

「(しっかしこれは少しやりすぎじゃないか? 今更だけでも……)」

プロシエクターには、多数の重機と作業員が活動する建設現場、完成しすでに稼働中の工場などの写真が次々と映される。

「建設要員として実体化させた作業員達は、重機をうまく使って工事してるようだね」

油圧ショベルやブルドーザーを操縦する作業員達の写真を見ながら、タクミはそう呟く。

召喚した時はどうなる事やらと心配していたが、作業員達は大きな事故や怪我もなく、重機を使いこなし、効率的に作業を行っている。

タクミの安堵の声を聞き、同じく会議に参加していた一人の少女が言葉を返した。

「は。閣下から提供して頂きました労働者は文句も言わず、命令を忠実に遂行してくれるため、工事は順調に大きな遅滞なく進行中であります。これもひとえに閣下の多大なるご支援とご配慮のおかげかとー」

その口調には一切の感情の起伏がなく、ただこれまでの成果を淡々と報告していく。そして最後は上司を立てる事も忘れない。そのようなエリート社員を連想させる金髪碧眼の少女。ー名は『ターニャ・フォン・デグレチャフ』。

「それで、ターニャ局長、戦略後方支援局に属する作業員達に異常はない?」

ターニャの言葉を聞いたタクミは、作業員達に異常がないか気になるそう聞き返す。

「はい。創設時に閣下から下された命令通り、作業員達の身体並びに健康状態の管理は欠かさず行なっております。作業時間は8時から18時までの間。その後は23時の消灯まで自由時間としています。食事は3食栄養バランスを考えたメニューを提供しています」

「そうですか。何かあればすぐに報告を」

「は。委細承知しました、閣下」

タクミの指示を聞いたターニャはそう言って一礼する。

ターニャ・フォン・デグレチャフはライトノベル小説『幼女戦記』に登場する主人公で、小説の中で、エリート社員として働いていたが、彼によって無慈悲にリストラされた元同僚によって駅のホームから突き落とされるが、死の間際存在Xによって魔法技術が発達した帝国という国—ドイッ帝国に酷似した国—の赤子に転生させられる。そして帝国軍士官学校に入学。高い状況判断能力と冷酷とも言えるほどの徹底した合理主義思考でわずか9歳で将校となった。士官学校卒業後は、安全な後方勤務を望んでいたが、存在Xの介入によって地獄の西部戦線の最前線へ送られる。

しかし西部戦線において、その合理的かつ柔軟な思考、時にリスクを顧みない決断力を遺憾無く発揮して数多の戦場を駆け回りその武勲は帝国の生ける伝説となった。まさにハメルに継ぐ傑物。

「（それにしてもかつこいいいな。もとが原作小説のフィギュア付き特装版のターニャで、ドイツ国防軍を模した軍服の上に黒い外套をマントみたいに羽織っているから、余計かつこいいんだよね〜）」

タクミは会議室に来る前に通路ですれ違ったメイドのように、ターニャの事をジロジロと見ながらそんな事を考えていると、視線に気づいたのか、ターニャが眉をよせ「小官の顔に何か？」と聞いてきた。

「ああ、すみません。その……戦略後方支援局はどうです？」

「は、万事滞りなく。閣下に提供していただいた最新PCや各種OA機器のおかげで、部下達も効率的に日々の業務に取り組んでいます。これも小官の要望を聞き入れてくださった閣下のおかげであります」

先ほどと同じような口調でそう答えるターニャ。もちろん最後に上司を喜ばせるヨイシヨも忘れない……。

ちなみにターニャが局長を務める戦略後方支援局とは、島の開発のために創設した組織である。任務内容はハメルが司令官を務める戦闘部隊の兵站補給衛生などの後方業務、そして各種生産施設やインフラ施設並びに軍事基地の建設も行う。組織のモデルは第二次大戦時に編成されていたドイツのトート機関だ。

イメージとしては戦闘全般がハメル、後方支援がターニャという区分けだ。

「小官に局長という地位を授けてくださりと、望外の喜びであります」
「うん。ターニャ局長には期待していますよ。だけど、あまり無理しないように……」

だんだんとターニャのヨイシヨが熱を帯びてきたため、タクミはそこで会話を切り、司会進行役の将校に会議を再開するよう頷く。

「あ、はい。では次に戦闘部隊を指揮するハメル司令お願いします」
司会進行役の将校はそう言って、プロジェクトターの画面は切り替える。次に写し出されたのは、島の防衛を担う戦闘部隊の配置図だ。

報告者であるハメルは、自身が指揮する戦闘部隊の配置場所をレーザーポインターで指し示しながら説明を始めた。

「現在島の防衛を担当する戦闘部隊は、戦略後方支援局が島内各所に建設した基地並びに監視所にて、すでに警戒任務についており、異常があれば直ちに行動できるよう出撃体制を整えております。警戒態勢につきましては順に説明していきます。まず海軍につきましては現在、オハイオ級原潜USSフロリダとアクラ級原潜K335ゲパードの2隻が海中で警戒任務についております。空軍は各所に設置したレーダーサイトにて未確認機による上空侵入を警戒中です」

そこまで黙って説明を聞いていたタクミは、質問をするために右手を挙げた。

「あのハメル司令。質問があるのですが、よろしいでしょうか？」

「ええ。構いませんが？」

「えっとですね。もし未確認機の侵入があった場合は、どうするのですか？」

「はい。それにつきましては……少々グレーな対応になりますが。通常の対領空侵犯措置では、1. 航空無線による警告、2. 軍用機による警告、3. 軍用機による威嚇射撃、4. 強制着陸、5. 撃墜という手順です。しかしこの措置は本来、独立主権国家の正規軍が国際法に則り対応する事を想定しています。なので国家として認められない我々の状況下で選択できる手段は、航空無線による警告と軍用機による警告の2択のみです」

「うーん、それは少し……いや、少しどころか限りなく黒ですね」

「閣下。そう仰いまして、この二つしかありません。もしそれ以外の選択肢を取れば、すぐさま武力衝突に発展します。これは空だけではなく、海もまた然りです」

「ハア、ここがマブラブ世界じゃなくて、剣と魔法のファンタジー世界であれば話は早かっただろうに。ああ、今のは別にただの言葉の綾だから、間に受けなくてくださいよ」

「ええ、もちろんです。閣下」

19世紀の欧州列強国のように武力を用いる外交。俗に言う砲艦外交を揶揄した発言を慌てて、修正するタクミ。その言葉を聞いた一部の軍人達から小さな笑い声が漏れる。

ハメルの説明を聞いたタクミは、椅子の背もたれに深くもたれると、16歳のである自分なりに考える。

現在マブラブ世界において、タクミ達が置かれている状況を簡単に表現するなら、この世界のどの国連加盟国からも国家として承認されていないにもかかわらず、不法に島を占拠してる武装集団である。しかもその武装は、前世のテレビニュースでよく登場した旧ソ連製のAKやRPGなどで武装したアフリカや中東の反政府ゲリラなどのレベルではない。

各国の最新鋭兵器で武装し、高度に組織化されたいわば軍隊だ。

「(どこの世界に、武装ヘリや戦車、ましてや核ミサイルを搭載した原子力潜水艦を所有する武装集団がいるんだ)」

世界に自分達の存在が知られた事を想像し、タクミは身震いする。

――強力な軍事力を保有する自分という存在を知ったら、世界はどうするのか。

タクミはこの瞬間改めて痛感した。自分の能力の恐ろしさを。

この島に存在するありとあらゆる物は、もとはタクミ自身が持っていたプラモデルや玩具だ。おもちゃとはいえ、実体化させれば本物と同じように機能し行動する。

それも自分自身が命令を下せば、なんでも……そう、なんでもだ。

一週間という非常に短い間ながら、バトレーやハメル、それにターニヤなどの幹部とその他の者達の言動を注意深く観察して分かった

事がある。それは彼ら彼女らは異常とも言えるほど、タクミへの忠誠心が高く、タクミの命令に対してはなんの疑問も持たず忠実に遂行する。

今の自分には、ただの模型好きの16歳の少年にとって、その忠誠心は重すぎる。

――彼らの上に立てるのか？　ただ模型しか作るしか能がない自分か？

不安や恐怖といった感情から、自己嫌悪に飲み込まれそうになるタクミ。しかし、そんなタクミを救ってくれたのは他でもない執事のバトレーだった。

「どうされました、ご主人様？」

「……え？」

突然、隣に控えていたバトレーから声を掛けられ、素っ頓狂な声をあげるタクミ。

「いえ、とても深刻そうな顔をされていたので……もしや、どこかお加減でも？」

「え、ああ……いや、これからどうしようかと考えてただけだよ。心配かけたね、バトレー」

その言葉を聞いたバトレーは、しばらく彼の姿をじつと見つめると、フツと微笑む。

「ご主人様。もし悩みや不安などがあれば、いつでも仰ってください」「え？」

「いかにご主人様が優れた能力をお持ちといえども、まだまだ知識も経験も不十分な状態です。なので1人で抱え込んだり、悩んだりしないで下さい。――それとも我々は頼りないですか？」

その言葉を聞いたタクミは顔をあげる。視線の先には自信に満ち溢れた表情で、自分を見つめる多くの部下、いや『同志』がいた。

――そうだ。僕は一人じゃない……彼らがいる。

タクミはフツと笑うと、「それじゃ、これから僕達が進むべき、道と一緒に考えようか」と言う。その言葉を聞いた者達は、踵をカツと合わせる、「ハッ！」と大きな声で答えた。

皆が再び、心を一つにしたその瞬間、会議室の扉が大きな音を立てて開かれた。やってきたのはドイツ国防軍の緑黄色の軍服を着た将校だ。

「し、失礼しますー！」

会議室にやって来た兵士をターニヤが咎める。

「何事だ、今は報告会の最中なのだが？」

「はっ！ 申し訳ありません」

ターニヤの言葉に兵士は萎縮してしまっただが、その兵士に対してタクミは「いいよ。報告を」と述べる。

「閣下、先ほど哨戒任務中のUSSフロリダから、複数の艦船が本島に向かっているとの報告がありました。報告をもとにすぐさま偵察衛星で確認したところ、空母を中心とした艦隊だと判明しました」

「どこの国だ」とハメルが問う。

その言葉を聞いた兵士は、気持ちを抑えるために唾をゴクリと飲むと答えた。

「ー米国であります」

第6話 戦闘準備

第6話 戦闘準備

へ1995年4月23日シルトクレータ島・地下司令部『アガルタ』へ向かう車中へ

夕陽が差し込み始めたシルトクレータ島。

紅く染められた密林に一本の道が敷かれていた。その道を黒い高級車が3台、猛スピードで走行していた。

「こうなる事は予測してたけど、いざそれが現実になると怖いもんだ」

島の 所有者 であるタクミはそう呟く。その声音からは不安が感じられる。なぜなら、艦隊接近の報告を受け、身の安全の為に現在、島の地下深くに建設された司令部へと向かう最中だからだ。

前世では、戦争とは無縁の平和な日本で暮らしをしていた彼からすれば、前世でも、そしてこのマブラブ世界でも最強の国であるアメリカの軍隊が向かってきているという事実は 恐怖 そのものである。その事を敏感に感じ取ったのか、隣の座席に座るバトラーが優しく語り掛け、彼の心を宥めようとする。

「ご主人様。そう怖がらずに。ーー全ては我らにお任せください。誰であろうと、この地、いえ……ご主人様には、何人も指一本触れさせません」

自らに忠実な執事の心強い言葉を聞き、タクミは少し緊張の糸が和らぐ。すると、二人の向かい側の座席に座っていた1人の男が声を掛けてきた。

「すまないねえ……私まで一緒に乗せてもらって」

「え、ああ……そんなに気になさらず、『スカル・フェイス』さん。……報告会の途中でしたから」

黒スーツの上から同色のチェスターコート、頭にテンガンロンハットを被った男、スカル・フェイスの言葉に、タクミは恥ずかしさを隠すように首の裏を手で掻きながら、そう答える。

「ーーなに、これは予測の範囲内だ。そう恐れる事はない。すでに

我々は、君が提供してくれた公式資料とやらをもとに幾つかのプランを策定している。不測の事態に備えてね……」

そう言つて、情報部の局長スカル・フェイスは口元をニヤリとさせる。しかし、頬の肉が完全に焼け落ちていたため、その笑みは昔のスリラー映画に登場した殺人鬼を連想させとても不気味だ。

「(うわ、コエエ！ 自分で召喚しておいてなんだが、その笑みを浮かべられると、ガチで悪魔だよ！ ーーだけでもこんな危機的状況のためか、今その笑みはどこか安心感を与える。さすがあのBIGBOSSを苦しめた男だ)」

スカルフェイス。前世の世界的人気潜入アクションゲーム、メタルギアソリッド・ファントムペインで主人公ビッグボスを、その高度な諜報技術と己の全てをかけて追い詰め、東西に分断している世界をメタルギアによってひとつにしようとした男。そんな彼はタクミによって、今度はこのマブラブ世界で、かつて自身が率いた組織に「新たな人員」を編入、再編成した。

スカルフェイスは足を組むと、淡々と言葉を続ける。

「それに島の近くには、合成食料を生産するために国連が建設した海上生成プラントがある。ーーアメリカとて、戦闘を行うつもりはないだろう……」

タクミはその言葉を聞き、首を傾げる。

BETAの侵攻でユーラシアの耕作地帯が失われた為、海中の魚介類やプランクトンをベースとした合成食を生産する施設が国連主導で太平洋と大西洋の広い海域に建設されている。そして、それらプラント群を保護する為、海域の広いエリアが非戦闘地域及び重金属の汚染を防ぐためのAL弾使用禁止区域に設定されている。

ちなみにシルトクレーテ島の近くに、国連管理下の合成食料プラントの一群が存在する事はすでに確認済みだ。

そこまで考えたタクミは溜息を吐きながら、頭を搔く。

「ハア、まあ、確かに国連の施設を巻き込む危険があるのに、戦闘を行う事はない、と思いたいですけど……」

だがこのマブラブ世界において、アメリカは名実ともに大国だ。9

9年の明星作戦での単独でのG弾投下、自国工作員を使用した内政干渉とも言える諜報活動、圧倒的軍事力及び政治力を背景とした国連の傀儡化など……。

「自国の国益と、その影響力を守る為ならば何でもやる。それが大国の外交方針だ。政府の右左問わずね……」

スカルフェイスはそう言って肩をすくめた。

メタルギアソリッドシリーズの世界で、CIA、XOFなどの諜報組織に身を置きながら、世界の暗部を長く見てきた彼は、超大国の行動原理をそう簡潔に述べる。

召喚したファイギュアの一部には、スカルフェイスのように自分がいた世界、つまり原作であるが、その世界での経験や知識を保持して現れる者がいる。そして中には「能力」を手に現れる者も……。

「もし米国との戦闘になったとしても、現状我々の戦力で対処可能だ。特に『あれ』が――」

スカルフェイスはそう言い、窓に身を寄せて空を見上げた。彼につられ、タクミも窓から空を見上げる。その視線の先には、丸い円盤状の飛行物体が2機が車列の上を飛行していた。

「ああ、『アंकシャ』ですな」

まるでそのUFOのような外観から、タクミはすぐに分かった。

RAS―96アंकシャ。ガンダムZに登場したNRX―044アツシマーの後継機で、大気圏内運用に特化した可変MSだ。

そのアंकシャを、スカルフェイスは興味深そうに眺める。

「それにしてもすごいな。――君の能力は……あんな物まで作り出せるとは」

「いやあく、もとはHGのガンプラだったので簡単でした。それにHGは、MG作るよりも時間も手間も掛からないですし……って、すみません。こんな事言っても分からないですよね」

つい模型に関しての自分の悪い癖が出てしまった、と頭を掻くタクミ。しかし、スカルフェイスはそんな彼の言動に眉を顰めるどころか、逆に褒め称える。

「いやいや、そうでもない。私自身、これまでメタルギアの開発に携

わってきたのだ。ーだからロボットやそれを模した模型には大変興味がある」

かつて、アフガンの辺境の地で、サヘラントロプスの極秘開発を主導していたスカルフエイス。もとはプラスチックの模型だとはいえ、メタルギアとは異なる世界で開発されたモビルスーツに大変興味を持っている。

「それに機体とともに、パイロットまで一緒についてきてくれたのは非常にありがたい。機体の構造解析や搭乗員の訓練などにとっても助かっている、とターニャ局長が話していた」

スカルフエイスがそう言い終えた瞬間、車が減速する。

タクミの隣に座るバトレーが口を開く。

「ご主人様、まもなく地下司令部に到着します」

「そうか。他のみんなもいるの?」

「ええ。すでに幹部と他の人員も待機しております」

車列が地下施設へ下降するリフトに乗る。

バトレーの言葉に頷きながら、タクミは窓から地下秘密基地の様子を眺める。明かりがないはずの山の中は、内部の岩肌にくくつも設置されている大型ライトのおかげで、まるで地上にいるかのような錯覚を覚える。

この地下司令部の名前は、『アガルタ』。19世紀末から20世紀のオカルトブームの全盛期に、アジアのどこかにあると噂された地下都市の名前からそう名付けられた。実際、その名の通り「基地」というよりも、「都市」という表現の方が適切かもしれない。

シルトクレーテ島中央の花崗岩の山中に建設されたアガルタ基地は、核戦争を想定した設計がなされており、長期間の地下生活ができるように食堂、医療施設、運動施設、売店、居住施設、各種生産施設なども存在する。そして地表部には対空砲やSAMが多数設置されており、防衛能力も高い。

最初と同じようにゴトンツと大きな音がし、ついにリフトが完全停止する。そしてリフトに乗っていた車両はゆっくりと発進する。

タクミ達を乗せた車列は、地下秘密基地アガルタの作戦司令部の入

り口で停車する。車両から降りたタクミを出迎えたのは、数名の部下を従えたターニヤだった。

「アガルタにようこそおいでくださいました、閣下」

その言葉の後、見事な敬礼をするターニヤ。彼女の背後に控える兵士達も同じように敬礼する。

まさに完璧な敬礼を行う彼女達に対して、タクミはぎこちない答礼を行う。

「あ、その、うん。わざわざ出迎えありがとうございます」

「ハッ！ では中へご案内致します」

ターニヤを先頭にタクミ達は新設されたばかりの基地内を歩く。塵一つ落ちていない通路を歩きながら、タクミは前を歩くターニヤに質問する。

「ちなみ、ここはもう完成しているの？」

その問いにターニヤは歩きながら答える。

「いえ、現在この基地の稼働状況は約60%です。しかし、シエルターとしての機能並びに運用は問題はありません。ご安心を」

「そうなんだね。でもこんな短い期間で、これほどの施設を作り上げたのはすごいよ。建設に携わった者達にも良くやったと伝えたいよ、ターニヤ局長。他に何か贈ろうと思うんだけど何かあるかな？」
労働にはちゃんとした対価を。いかに召喚された者達が寝食いらず、疲れ知らずとはいえ何もしないのはまずいだろう、と思いそう言う。

しかし、ターニヤは「いえ」と答え、言葉が続ける。

「そのお言葉を賜っただけでも、部下達のこれまでの苦労も報われま

す。閣下」

「うーん。そう言われても、やっぱり気になるんだよね」

「そうですか。それでは何かお菓子を頂けませんか……」

「(ん？　なんか顔赤くない？　ああ、もしかしてスイーツが好きなのかなあ〜)」

ターニヤの横顔が少し赤くなっているのに気づいたタクミは、彼女の様子からそう思考する。

「うん、了解。後で送るよ」

「ありがとうございます。閣下」

〈秘密秘密基地『アガルタ』・作戦司令室〉

作戦司令室の扉の両側には、G36で武装した兵士2名が立哨していた。兵士達は敬礼し、扉を制御する電気錠を解錠する。プシュッと空気が抜けるような音をさせ、扉は左右に開いた。

タクミが入ったのは、中央に円卓が設置された2階の部屋だった。巨大なはめ殺しの窓からは、指揮通信用のコンソールに座り、忙しく命令を出すオペレーター達の姿が見える。

〈――第6防空陣地への弾薬移送準備完了〉

〈――装甲擲弾兵部隊の出撃完了〉

〈――出撃可能な部隊はすぐ配置につかせるッ！ 間違ってもこちらから攻撃するな、それを徹底させろ！〉

鬼気迫るオペレーター達の声がガラス越しに聞こえる。正面の壁に設置された巨大モニターには、沖合に展開するアメリカ艦隊の艦影がはつきりと映し出されている。

「(もし戦争にでもなったら……)」

目の前の脅威、迫り来る危機をヒリヒリと感じる。ここに来るまでに消えたと思っていた『恐怖』が胸に湧き上がり、胸の動悸が速くなり始める。動揺を周囲に悟られないように、手を口に当てようとした瞬間、背後から声を掛けられた。

「(ご主人様」

「え？」

突然、背後から声を掛けられたタクミはすっとなん狂な子を上げる。振り返ると、そこにはバトレーが立っていた。

「バトレー……」

「(ご主人様、作戦会議の準備が出来ましたので、(ご)着席下さい」
「分かったよ」

バトレーに促され、タクミは円卓の上座に着席する。

会議室にいるのは、各セクションの重鎮や幹部などがいた。円卓に着席しているのは部隊の最高指揮官であるハメル、後方戦略支援局局

長のターニヤ、統合情報局局長のスカル・フェイスが着席していた。その他には、世界各国の軍人達が資料を手にして控えている。

一番最初に声を発したのは、ハメルだった。

「閣下、先ほど米艦隊からこちらに対して通信がありました」

「それで、向こうはなんと？」

「〃島内に配置したミサイルと所有する戦術機の引き渡し〃……そして、〃速やかに武装解除を実施し、投降せよ〃と……」

「……一応こちらの事は、先に伝えたんですよね？」

米国側のあまりにも一方的な要求に頭を抱えながらも、タクミは事前に皆と話し合った事を思い出そう尋ねる。

「ええ、我々は〃異世界〃から島ごと、この世界に転移してきた、とあちらには伝えましたが……」

「まあ……そうですね。考えておいてなんですけど、それで「はい。そうですね」とはならないですよ。普通……」

「ええ、通信を行ったオペレーターのそばで聞いていた私自身、そう思いましたよ」

その時の光景を思い出したのか、ハメルが苦笑いしながらそう答えた。

タクミ自身、人から突然「自分は異世界から来ました」などと言われても、冗談の類いだと思つて素直には信じられないだろう。だが実際のところそう言うしかない。

「ん？ そういえば〃ミサイルの撤去〃つて？」

「〃ミサイル撤去〃の文言が、気になりそう問いかけた。その質問を聞いた、情報担当のスカルフェイスが机に肘をつきながら答える。

「おそらく、君が以前実体化した〃トールポリム〃の事だろう……」

「ああ……あれですか」

スカルフェイスのその言葉に、タクミはそう言つて数日前に自分が行った実験を思い出した。

「トールポリム〃。正式名称RT-2PM2トールポリムは、ロシア連邦が開発した大陸間弾道ミサイルで、NATOコードネームでは、シックルBとも呼ばれる。前世のロシア連邦軍の戦略ロケット軍が

2000年に実戦配備したTEL（輸送起立発車機）型ミサイルだ。「まさか実体化させたら、ミサイル本体だけじゃなくて、核弾頭も実体化してまうとはね……」

数日前、タクミは自分の召喚能力を試すために、携帯から1/35ロシア軍RS-12を実体化させた。するとミサイル本体だけでなく、運用に必要な操作要員のロシア兵、指揮通信車、そして核弾頭まで一緒に現れた。

数日前の出来事を思い出し、顔を顰める。

「あの時、偵察衛星に撮られたんでしょね。迂闊だったな……」

ミサイルを召喚した事で、アメリカを不用意に刺激してしまった事を今更ながらに悔やむタクミ。落ち込む彼を見ながら、情報部のスカルフェイスは言葉を続ける。

「トーパーMの最大射程は約1万キロから1万1000キロメートルだ。この島からだとなワイやグナムはもちろん、アメリカ東海岸まで範囲に含まれる。ホワイトハウスまでだ。だからアメリカ側はこのような強行姿勢なんだろう。彼らからすれば、突然自分達の目と鼻の先に突きつけられた銃口を、いますぐにでも取り払いたいんだろう。彼らの仰天ぶりが目に浮かぶ」

いつもの飄々とした態度で、アメリカの姿勢を簡潔に述べるスカルフェイス。そんな彼の言葉を聞いたタクミは顎に手を当てほんの少し考える。

「だけどミサイルより、モバイルスーツを入手したいという気持ちの方が強そうな感じがしますけど？」

「まあ、それもあるだろう。実際ミサイルよりモバイルスーツを手に入れたら、技術を解析したいというのものもある。それにBETA大戦で成果を何も上げれてない分、所属不明の武装集団である我々への対応で何かしらの政治的成果を世界に示したいんだろう」

偵察衛星による情報収集を行った結果、BETA群はすでに中国と北朝鮮の国境付近にまで進撃している。極東アジア地域が陥落するのは時間の問題だ。アラビア半島、欧州大陸もすでに蹂躪され、至る所に「ハイブ」と呼ばれる地上モニュメントが建造されている。

止まる事のないBETAの進撃に対して、人類はまず欧州大陸で、1978年にNATO軍とワルシャワ条約機構軍による旧ベラルーシ領内に建造されたミンスクハイブ排除を目標とした『パレオロゴス』作戦を発動するも、作戦は失敗。その後中国大陸でも同様の作戦を実施するも同じように失敗した。

「米国はすでにBETAへの反抗よりも、奴らをユーラシアに『封じ込める』事に戦略を転換している。その戦略転換は、BETAによって国土を失いアフリカやオセアニアへ疎開した各国亡命政府、そして流浪の難民となった市民達への裏切りとなり、米国の国際社会における求心力は低下している……。そんな最中、自分達の庭先に未知の技術を持つ武装集団が現れた。彼らかすれば、喉から出るほど欲しいはずだ。我々が持つ物を……」

「向こうの事情は分かりましたよ。で、アメリカとの通信ラインは繋がっていますか？ ハメル司令」

タクミはそう言って、ハメルへ問いかけた。

「ええ、沖合に展開している米海軍空母セオドア・ルーズベルトを經由し、ワシントンDCのホワイトハウスへ繋がっている、と彼らは言っています」

「そうですか」

「そんな事しなくても、こちらから米国政府の暗号回線をハッキングして、直接大統領とやり取りする事も可能だが？」

スカルフェイスはニヤリとさせながら、タクミにそう伝える。

「いやいや、それはやりすぎですよ。（え、政府の極秘回線にハッキングできるの？ 君達、もとプラモデルよね？）」

タクミは、政府の極秘回線にハッキングできると言っただけのけたスカルフェイスの言葉を聞き、心の中で冷や汗を流す。

「閣下、アメリカ側との交渉は誰が担当しますか？」

ハメルがそう問いかける。それを聞いたタクミはしばらく考える。

交渉のラインはある。あとは『交渉人』だけだ。

「よし、交渉人はターニャ局長にしましょう」

「訳を聞いても？」

「ハメル司令は部隊の指揮を取らなければいけないし、スカルフエイスは情報部門だから、あまり表に出るのはまずいです。なので、冷静な判断力と分析力を持つターニャ局長なら適任だと、僕は考えました」

交渉人にターニャを選んだ理由をそう述べるタクミ。

ターニャは前世でサラリーマンとして働いていたので、他の二人より柔軟な対応ができるだろうと考えた。

彼は最後に席に座っているターニャに目を向けた。

「ターニャ局長、よろしくお願いします」

「はっ！ お任せください。閣下」

タクミの言葉に、ターニャは力強く答える。

「それじゃ、みなさん。今後の方針を伝えます。まず第一に武力衝突の回避、第二にこの島での我々の生存権の確保です。この二つを達成するため、どうか僕に力を貸して下さい」

タクミの言葉を聞いた幹部と兵士達は、踵をカツつと合わせ、『ハッ!!』と答えた。

こうして彼らは、世界最強の国家であるアメリカとの戦いが始まった。

第7話 サイコパス

第7話 サイコパス

へ1995年4月24日 ホワイトハウス西棟地下・シチュエーションルーム

ホワイトハウス西棟地下のシチュエーションルームの照明が落とされ、国防総省やCIA（中央情報局）の情報担当官達がスライドショーを始めた。

偵察衛星が撮影した写真の一部には、ぼけているものもある。しかしその写真には、戦車や装甲車、武装ヘリに戦闘機などの重火器、武器を所持した兵士達、戦術機らしき機体などが写っていた。薄暗い室内にいる人間達は、それらから目を離さず真剣に見つめている。

テーブルを囲んでいるのは、アメリカ合衆国のNSC（国家安全保障会議）のメンバー達だ。大統領のジョンは座長席に座り、その周囲には側近で、国家安全保障担当補佐官のジェイク・カールツチや国防長官を務めるノーマン・ワインバーガーなどがいた。

大統領のジョンは、次々と写される写真に見入っている。

スライドショーが終わり、シチュエーションルームに再び明かりが戻る。そして空軍の青い制服に身を包んだ将校が説明を始める。

「島を占拠する武装勢力は、『レイブンスロック』という名の『私設武装組織』という事が判明しました」

『レイブンスロック』……私設武装組織という事は、彼らは何者かに雇われているという事かね？」

「サー、その通りであります。大統領閣下」

長机の上座に座っていた大統領のジョンのその問いに対し、若い空軍将校は領きながらそう答えた。

「彼らの説明によると、島は『シルトクレーテ島』という名の『私有地』で、自分達はその所有者に仕えるPMCだと……」

「ん？　PMCとは、何だね？」

聞いた事のない単語を聞き、ジョンは首を傾げながらそう問いかける。

「Private military company 通称PMCと呼ばれる民間軍事会社です。主にクライアントに対して戦闘、兵站、訓練などの軍事サービスを提供する企業。いわば傭兵のような組織と認識していただければ良いかと……。説明によれば、自分達は島の所有者によって設立されたPMC所属の武装兵士であり、保有する兵器や資材も所有者から提供された物であり、そして最後にこの世界とは別の世界から島ごと、この世界に転移してきたと……」

その瞬間、会議室内の至る所から笑い声や嘲笑の聲が上がる。

「フン、馬鹿馬鹿しい。何がPMCだ。所詮ただの戦争の犬どもに過ぎん、すぐさま排除すべきだ」

「異世界だと？ 過激な宗教カルトではないのか？」

「背後にいるのはEUかソ連、もしくは日本だろう。大量の軍事物資を保有する個人などいる訳がない……」

さまざまな憶測や推測などが会議室を飛び交う中、一人の男が手を挙げた。それに気づいた将校は、一瞬その人物に声を掛けて良いか戸惑い、大統領のジョンに目を向けた。

目を向けられたジョンは、笑みを浮かべ軽く頷き了承の意を示す。

「トランブル下院議長、如何されましたか？」

その瞬間、それまで騒々しかった会議室が一瞬で静かになった。だがレーガン政権で国防長官を務めるノーマン・ワインバーガーだけ、アーサーの姿を見た瞬間、まるで不愉快そうに眉を寄せる。

「トランブル下院議長。失礼ながらあなたは、ここにおいては……」

本来NSCのメンバーではないが、特例として参加を許された存在である下院議長のアーサーの行動を窺めようと声を発したが、大統領のジョンが手を挙げて、それを制す。

「ノーマン。今我々は、深刻な脅威に直面している自由世界で暮らす人々への攻撃を防がねばならないんだ。だからこそ、今は知恵ある者全ての意見が必要なのだ」

大統領のジョンは、ノーマンにはつきりとそう告げる。それを聞いたノーマンは渋々了承した。

「では、アーサー」

大統領から発言の許可を得たアーサーは「ありがとうございます。大統領」と述べ、気持ちを落ち着かせるために小さく息を吸い込むとゆつくりと口を開いた。

「みなさん、今議論すべきなのは、彼らの正体や支援国を明らかにする事ではなく。今後、我々が取るべき選択肢を考える事です」

何を当たり前の事を言っているのだこの男は、と政権幹部は心の中でせせら笑う。そんな彼らを代表し、国防長官のノーマンがそれに答える。

「議長、選択肢はすでに決まっています。ー空爆を実施したのち、海兵隊による上陸作戦を行う。そして敵を掃討する。それしかありませんよ」

ノーマンのその発言に、統合参謀本部議長や軍高官達は頷く。だが、そのあまりにも強硬な発言を聞いたアーサーは、とんでもないとばかりに首を横に振る。

「そんな事を行えば、我が軍に甚大な被害が発生します。あなたもこのレポートを読んだはずだ」

そう言つて、アーサーはレポートを掲げる。

「島の至る所に配備されたSAM（地对空ミサイル）や砲撃陣地。それにー」

「議長が憂慮されている事は分かります。だからこそ早急に動くべきなのです！ 島が見つかったから、すでに一週間が経過しています。その間に新たな陣地が構築され、島は難攻不落の要塞に様変わりしようとしている。これ以上の傍観はできません！」

ノーマンは強い口調で、さらに捲し立てる。

「それに幸いな事に、奴らがいる島は太平洋にある。つまり光線級によるレーザー照射に怯える事はないという事だ。空爆には、海軍航空隊の戦術機部隊だけでなく、グアムのアンダーセン空軍基地に配備されたB-52戦略爆撃機による爆撃も可能という事だ。それに空がダメなら、海上からの艦砲射撃を行えばいい」

「横須賀に停泊中の第7艦隊の他の艦船も、事態の急転に備えてすでに出航しております」と海軍高官も続く。

もはや軍事作戦という選択肢しかないような物言い、流石のアーサーも啞然とする。

「長官、そんな大規模な着上陸作戦を太平洋で実施すれば、環太平洋地域の不安定化は免れない！ それに、周辺海域には国連管理下の食料プラントが数多く存在している。ただでさえ世界的に食糧不足が深刻化しているというのに、あなたはさらにそれを高めようというのか！」

普段あまり大きな声で、それも感情的に喋る事はないアーサーだが、今回ばかりは違った。その証拠に顔は高ぶる感情で紅潮し、呼吸が追いつかず肩で息をしている。

「議長。太平洋の平和と安全を守り、この海域を通る数多くの船舶の航路を確保する。中南米がアメリカの裏庭と言われるように、太平洋もまた我が国にとって大事な生命線なのです。そんな場所に、ミサイルを所持し、訳の分からん世迷言を言う『頭のいかれた連中』をのさばらせておく事はできない！」

すでに人類の経済活動と生産活動のほとんどが鉱物資源が豊富なアメリカ大陸や広大な耕作地帯を持つオーストラリア大陸、そして南北アメリカ大陸に集中している。ここではBETAに立ち向かうために必要な戦術機を始めとした軍需品、人類が生きるのに必要な食糧を日々生産している。だが光線属種の出現による空路の消失で、経済や貿易や通商にとって安全な海洋航路の戦略的重要性は更に高まっている。これを損なえば人類は戦い続ける事ができない。

「アーサーだが、そんな事はアーサーだって百も承知だ。だからこそ、慎重な対応が必要なのではないか。」

「そう口を開こうとした瞬間、大統領のジョンがそれに待ったをかけた。」

「二人とも、そこまでにしたまえ」

「……」

「申し訳ありません。大統領」

会議の方向性を皆に示そうとしたはずなのに、いつの間にか感情の赴くままに議論をしてしまった事をアーサーは恥じた。彼の気持ち

を察したのか、ジョンは笑みを浮かべる

「諸君。少し休憩しようじゃないか。いつまでもこんな穴倉にいては、モグラになってしまう」

ジョンが言ったそのジョークを聞き、NSCのメンバー達から笑い声が漏れる。

「では、60じゆ「大統領ツッ!」ん?」

腕時計を見ながら、皆に次の会議開始時刻を示そうとした瞬間、コンソールに座っていた一人の通信将校が慌てた声でそうやってきた。「どうしたのかね?」

「ハッ! つい先ほど、『交渉人と名乗る人物』から、通信が入りました」

「何っ!」

通信将校の報告を聞いたジョンは驚きのあまり目を見開き、声を上げる。他のメンバー達も同様に驚き、互いに顔を見合わせる。

「すぐに繋ぎたまえ」

「ハッ!」

ジョンの指示を聞き、補佐官達がすぐさま準備をする。そして準備を終えた彼らは手で合図する。

「君が「交渉人」かね?」

ジョンの問いかけにスピーカーの相手は何も答えない。沈黙が会議室を支配する。こちらからの問いかけに答えない相手に対し、会議室内にいる人間達は顔を見合わせる。

そして、沈黙は破られた。

「ー! そうだ。そちらは?」

聞こえてきたのは英語だった。それも女の声だ。しかし女と言っても、かなり幼い「子供」の声だ。

突如、スピーカーから聞こえてきた幼女の声に、ジョンは一瞬思考が固まるが、慌てて首を横に振り、気を取りなおす。

「あ、ああ。私はアメリカ合衆国大統領ジョン・レーガンだ。お嬢さ……君の名前は?」

危うく「お嬢さん」と口にしかけ、慌てて訂正するジョン。だが交渉人の幼女は気にする事もなく、凜とした声で自らの名前を名乗る。「これは失礼。大統領閣下。私はターニヤ・フォン・デグレチャフと申します」

「ターニヤ・フォン・デグレチャフ」。その名をアーサーは頭に焼き付ける。周囲の長官達も小声で、部下達に指示を出す。

「デグレチャフ」ターニヤで結構です。大統領閣下、あ、ああ、ありがとうございます。では私の事はジョンと呼んでくれ」

デグレチャフと呼ぼうとしたジョンの言葉を遮り、ターニヤは自分をファーストネームで呼ぶ事を許可する。ターニヤの言葉を聞いたジョンは笑みを浮かべる。そして自分の事も、同じようにファーストネームで呼ぶ事を許可する。

「ではターニヤ。君達の要求を教えてくださいかね？」

「大統領。私達の要求は二つです。まず第一に、沖合に展開する艦隊を引き上げ、海上封鎖を解く事。第二に、これ以上の事態悪化を防ぐための会談の場を設ける事です」

ターニヤの要求内容を聞いたアーサーはひとまず安心する。なぜなら、相手側からこちらへの歩み寄りの意思を感じたからだ。

「(相手側には、こちらと交渉を行う意思がある事は確認できた。あとは相互理解に努め、どこに妥協点を見つけ出すかだ)」

アーサーが心の中で安堵の声を呟き、張り詰めていた緊張の糸を少し緩めようとした瞬間、彼を衝撃が襲った。それも「大統領」からだ。

ターニヤの要求を聞き、それまで椅子の背もたれに深く身を預けていたジョンは姿勢を直し、そう問いかけた。

「そうか。……では君達は「武装解除に応じない」という事かな？」
「ッ!?!」

ジョンの言葉にアーサーは絶句する。驚愕で身を固めていた彼の耳にターニヤの凜とした声が響く。だが先ほどとは違い、その声音は、恐ろしいほど冷たかった。

「……大統領。私は「これ以上の事態悪化は避けたい」と述べたはず

ですが？」

「ターニヤ。ー事態を悪化させない為には、まずはお互いをよく知らなければならぬ。良い人間関係に必要なのは、相手への『思いやり』だと私は思うんだよ。それに、武器を手にしたまま握手はできない？」

まるで幼稚園児に友達の作り方を教える先生のような優しい口調で、そう述べるジョン。周囲に座る側近達も口元を抑え、必死に笑い声を抑えている。

そんな彼らのあからさまに相手を見下す態度にアーサーは侮蔑の念を禁じ得ない。

「(なんと愚かな……)」

先ほどまでの恐れはどこへやら。武装集団側の交渉人が『得体の知れない危険な男』ではなく、『非弱で可憐な少女』と知り気をよくしたようだ。

どんな連中かと思つたら、子供を交渉人に立たせるとは、連中は相頭が『イカれている』と。

この世界の超大国であるアメリカ合衆国、その頂点に立つ合衆国大統領と会談をしたいという自称交渉人を名乗る少女の言葉を真剣に受け止める政府高官はここにはいなかった。しかし、アーサーだけは違つた。

「(交渉人を子供に？ 何が目的だ?)」

自分達のこれからの運命を決める大事な交渉役に、ターニヤという年端もいかない少女を立てたレイブズロックの心意を図りかねる。

戸惑い、憐憫、嘲りなどの感情が、ホワイトハウス地下深くに設けられたシチュエーションルーム内を覆う。だがそんな室内にターニヤの声が響く。

「ふむ。そうですか。では……我々の事をよく知っていただきましょうか」

「は？」

ターニヤの言葉を聞き、誰かが間抜けな声を発する。その瞬間、それまで国内外情勢を伝えるニュース映像を映していた巨大モニター

の画面が真っ黒になり、何も映さなくなった。

「おい、何が起きた!」

「ふ、不明ですッ! こちらからアクセスできません。おそらく、外部からの攻撃かと?」

「外部だとッ? このアクセスコードは、部内でも最高機密のはずだ!」

シチュエーションルームは元々、合衆国大統領が全世界に展開する米軍部隊の指揮管理や国内外の政府機関との密な連携の為に使用される。それゆえに、通信インフラ及びそのアクセスコードは、幾重にも張られた暗号プロテクトによって防護されている。暗号プロテクトの開発には数多くの大学や政府機関所属の人間が携わってきた。まさにアメリカの最高傑作といえる代物である。それがいとも簡単に破られた事実には、オペレーター達が慌てふためく。

「諸君! 落ち着きたまえ!」

突然の出来事に浮き足立つシチュエーションルーム内に、ジョンの声が響き渡る。普段あまり大声を出さない彼の声に驚き、皆の視線が大統領に集まる。しかし視線の先の大統領は目を大きく見開いていた。

「ーなんだ?」

不審に思った彼らは視線をモニターの方へ戻す。するとモニターには巨大な鴉(からす)らしき模様が浮かび上がっていた。そして、画面が自動で切り替わり、映像が始まった。

「ー親愛なるアメリカ国民の皆様。偉大な先人達によって、今日の我が国の繁栄がー」

「なんだこれは……」

アーサーが画面を見ながら戸惑いの声を漏らす。

画面には戦後歴代の大統領達が議会やホワイトハウスで行った演説の一部を繋ぎ合わせたと思われる。いわゆるモニタージュ映像が流れていた。

その場の全員がモニターを凝視する。

「――長引く大戦による軍事費の増加で、経済はひどく疲弊している――」

「――強欲で無責任な者達、そして労働者から搾取する大企業――」

「――家は失われ、仕事は減り、商売は破綻、医療費は高く、学校は荒廃――」

「――国民の日常と自由が侵害され、邪悪さという人間の最悪の特性に遭遇――」

「――これらに対し、私達は最良の方法を見つけました――」

「――『米国に神のご加護を』――」

最後に映し出されたのは、現職大統領のジョンが顔に笑みをたたえ、演説をそう言って締めくくるシーンだった。そして画面は切り替わり、次に映し出されたのは白く巨大なドームが特徴的な議会議事堂だった。

「『新世界へようこそ』だと……」

画面下に表示されたテロップを見たアーサーがそう述べる。

数秒の間を挟み、アメリカ政治の象徴である議会議事堂は文字通り、木っ端微塵に爆発した。

「ああ!! なんてこったッ!？」

「嘘だろう!!」

「おい! 今すぐUSSCP（合衆国議会警察）に連絡し、状況確認だ。急げ!!」

議事堂爆発を目にし、シチュエーションルームは再び混沌が支配する。そのあまりにも衝撃的な映像に何人かは口を抑えたり、現実から目を背けようと首を激しく横に振っている。

そんな混沌とした室内に、ターニャの笑い声がスピーカーから聞こ

えた。

「ハツハツハ!! みんなのおかげで、新世界の扉は開かれましてあ〜! はい拍手!」

先ほどと打って変わり、まるで悪戯が成功した子供のような声で語るターニヤ。交渉人の変貌ぶりに驚く一同。しかし国防長官であるノーマンが怒りに声を震わせながら言葉を出す。

「やってくれたなツ!! 貴様!!」

「ん? どなたですか?」

「国防長官のノーマンだ! いいか! 貴様が破壊したのは我が国の最重要政府施設であり、貴重な文化遺産だ! これは我が国に対する明らかな戦争行為だぞツ!」

顔を紅潮させながら、早口でそう捲し立てるノーマン。しかしスピーカーの向こうにいるターニヤは少しも動揺を見せず、冷静に言葉を返す。

「そんな深く考えずに。建て替えの時期だと思えばいいじゃないですか?」

あっけらかんとした口調でそう述べるターニヤ。自分がしでかした事の重大さやそれに対する罪の意識が少しも感じられない彼女の態度から、その場にいる皆が思った。

「ーこいつは、『化け物』だと。」

先ほどまで自分達が彼女達を「狩る」立場にいたのに、気づいたら「狩られる」立場にいるのだから……。想像を絶するほどの『恐怖』が、その場を支配する。

すると、状況確認を行っていた一人のオペレーターが大声で報告する。

「報告します! 議会議事堂に異常ありません!! 健在です。現在施設内の点検を行なっています」

「「おおお」」

その報告を聞き、室内にいた全員が安堵の声を漏らす。

「さて、大統領。これで我々も「思いやり」が必要な存在だと認識していただけましたか?」先ほど言ったように、艦隊をすぐに引き上

げてください。艦隊の撤収が確認できしだい、こちらから再度連絡を実施します。それまで、こちらから一切の攻撃は行いません。もちろん自衛行動に限りですが……」

議会議事堂の無事という事を知ったジョンは少しばかり落ち着きを取り戻し、ターニヤの言葉を冷静に聞く。そして最初と同じくテールに身を乗り出す。

「分かった。……しかし、ターニヤ。艦隊を引き上げるには君たち『協力』が必要だ」

「『協力』ですか？」

「艦隊を引き上げるには、君達が安全であると世界に証明しなくてはならない。なので君達が所有する『ミサイル』の撤去が前提条件だ」

先ほどのサイバー攻撃とフェイク動画を目にした事で、レイブンスロックに対する政府閣僚達の認識は変わった。彼らは『頭のイかれた連中』ではなく、『イかれた事を良心の呵責なく、正確に、そして躊躇なく行う組織』だと。しかし世界の守護神を自称するアメリカにも面子があるため、ここでなんの見返りもなく要求を受け入れれば国内外から、アメリカがテロに屈したと思われかねない。だから『協力』という言葉を使用する事で、『アメリカが一方的に譲歩した』という最悪の事態は免れる。世論も問題ない。

「どうだろうか？ ターニヤ」
「フム。……わかりました。こちらも少しそれで話をしてみましょう。」

「そうか、助かるよ。他国への説明は我々合衆国が責任を持つて行う」
「わかりました。では48時間後に再度こちらから連絡します」

「その間は双方『武力行使は行わない』という認識でいいかね？」

48時間に対する双方の認識を統一するため、ジョンはそう問いかける。

「ええ、その認識で構いません」

「分かった。ではターニヤ、ともにこの危機を乗り越えようじゃないか」

「では大統領。これで失礼します」

その言葉を最後に通信が途切れた。それを確認したジョンは椅子の背もたれに深く身を預ける。そして口から大きく息を吐き出す。ふと顔を上げると、次の指示を待つ政府閣僚達の不安げな眼差しが、自身に向けられていた。

ゆつくりと姿勢を戻したジョンと、そばで控えていた秘書官に指示する。

「ああ…マーサ。コーヒーを頼む。ミルク入り、甘味料2つ、カップでだ。紙コップではなく……」

ジョンの言葉を聞きながら、彼らは困惑しながら互いに目を合わせ。何を言うかと思えば、今後の政府の行動ではなく、自分が飲みたいコーヒーについて話し出したからだ。

秘書官に指示し終えたジョンはニヤリとする。

「妻からは『血糖値が上がるからやめて』と言われていたのだが。今回ばかりはカフェインの魔力すら借りねば勝てん相手だ」

そのジョークを聞き、室内に張り詰めていた緊張の糸が少しばかり弛緩する。皆の顔に正気が戻ったのを確認したジョンは「よし……」と一言呟くと、指示を出し始める。

「『脅威は本物』だと改めて認識した。……まずはFBIの犯罪プロファイラーに交渉を録音したテープを提供し、ターニャ・フォン・デグレチャフの分析を行うように伝えるんだ。それと再度、身元の確認を。捜査当局の前科者リストに登録されている人物並びに移民管理局に登録されている移民も対象だ。次に政府施設の安全確認を実施し、警戒レベルを強めるんだ……。さっきのはフェイクだったとはいえ、本物の爆弾が仕掛けられているかもしれない。そして私はこの後、国民に向けての記者会見を行う」

「分かりました。大統領」

「すぐ報道官に手配させます」

「サー。大統領」

ジョンの指示を聞いた職員達から了解の報告が次々に上がる。そ

して最後に彼は室内にいる全員の顔を見回す。

「諸君。これは重要な任務だ。我々の暮らしをこの脅威から守ってくれ。これほどの大きな務めはないし、これ以上の名誉もない。――君達の奮闘を期待する」

第8話 『人形使い』

第8話 『人形使い』

〈シルトクレーテ島・秘密地下基地『アガルタ』〉

タクミは、作戦司令室を出て、建物内にある 〃とある一室 〃へ向かっていた。彼の背後にはバトレーと、スカルフエイスが付き従う。ハメルは部隊指揮の為、ターニヤと共に司令室に残っている。

通路を歩いていると、背後を歩いていたスカルフエイスが苦笑いを浮かべながら声を掛けてきた。

『レイブンスロック』。 〃鴉へカラス〃とは……確かに我々という存在は、もとの世界からこの世界にやってきた鴉のような存在。いや。もしくは…… 〃君自身 〃が鴉とも言えるな。ハツハツハ

「イヤア、アハハハッ」

スカルフエイスはいつもの如く飄々とした態度で、先ほどアメリカ側に伝えた組織名についての私見を述べる。それを聞いたタクミは頭を掻きながら苦笑いする。だが、その言葉を隣で歩きながら聞いたバトレーは不快にそうに眉を顰め、それを嗜める。

「スカルフエイス。言葉に気をつけなさい。それは我らが主人であるタクミ様を侮辱するも同じ、不敬ですよ」

そう言った瞬間、バトレーはスカルフエイスに向けて少しばかり殺気を放つ。しかしスカルフエイスは気にする事もなく、「これは、失礼」と言って苦笑いする。

『PMCレイブンスロック』とは、アメリカ側との交渉の直前にタクミがつけた組織名だ。

「それにしても、ターニヤも急に無理を言ったものだ」

「アメリカ側にこちらの力を見せつけるのに必要でしたからね。最初はどうなるかと思いましたが。その後の交渉はうまく進んだので、よかったですよ」

タクミは、先程まで作戦司令室で行われていたターニヤとアメリカ

政府の交渉を思い出す。交渉の邪魔にならないように黙ってやり取りを聞いていたが、アメリカ側は明らかに子供である彼女を下に見て、対等な交渉相手として認めなかった。

「(あんな扱いされたら、誰だって機嫌悪くするよな)」

明らかに自分に対して相応しい対応をしないアメリカ側に、ターニヤは明らかに機嫌を悪くし、目の前の通信装置を破壊しかねないほどだった。だが、とうとう我慢の限界に達したのだろう。途中メモ紙にペンでさつと何か文字を書いた彼女は、それをそつとタクミに差し出した。そのメモにはこう書かれてあった。

「『彼を使いましょう』と。」

メモを見たタクミは、その文言に一瞬躊躇いの表情を浮かべたが、ターニヤの真剣な眼差しを見て覚悟を決めた。実際の所、傍で交渉のやり取りを聞いていたが、アメリカ側の言動から、彼らがこちらを下に見ているというのが明白だった。交渉においては、誠実な姿勢と誠実な対応は交渉を進める上で大切な基礎部分だ。だから『自分達と対等な存在もしくは、敬意を払わなければならない存在』とアメリカ側に認めさせる為に、タクミは最終的に『彼』を使用する事を許可した。

アメリカ側からしてみれば、自分達との交渉相手が『幼女』というのはかなり衝撃な出来事だったはずだ。

「(まあ、その後のハッキングとフェイク動画の方がさらに衝撃だったと思うけどね!)」

ハッキングが成功した瞬間のアメリカ側の阿鼻叫喚を聞いた時は、かなり気分が良くなった。ターニヤに至っては、普段の鉄仮面を脱ぎ捨て、大喜びしていた。だがその顔は原作で見たのと同じく、まるで悪魔のようではあったが……。

「でも、スカルフェイスさんもなんだかんだ言って、彼の力を見たかったんでしょ?」

「もちろん。……彼には私も非常に関心を持っていたよ。事実、彼の力は私の想像を遥かに超えていた。なぜなら起動からわずか一分で、厳重に防護されていたホワイトハウスのサーバーをハッキング、その

後彼らの度肝うを抜くようなフェイク動画まで流したのだから……。なんとも恐ろしい存在だよ、彼は」

ほんの少し前に見せつけられた彼の力を高く評価するスカルフェイス。

「もともとは彼は、ネットワーク上に登録された膨大な数の企業情報や個人情報を検索する為に作られた存在なんですよ。実体化した最初の頃は、原作と違う環境下での運用に不安があったんですけど……。まあ、正常に機能してくれたので良かったですよ。アハハハ……」

そんな事を話しているうちに、3人は金属製の扉の前に到着した。タクミは服のポケットから、IDカードを取り出し、扉の横の機械に差し込む。カード内の電子情報を読み終えた直後、プシュという音と共に扉は左右に開いた。3人はゆっくりと中に入る。

入室した途端、扉が締めまり一瞬だけ暗くなつたが、人感センサーが反応して、床に埋め込まれた誘導等がぼんやり淡く光だした。

床の明かりを頼りに部屋の中央に向かいながら、タクミは室内に何十、何千と設置された漆黒の塊を見る。その表面は、赤や緑、黄色やオレンジなどの光が高速で明滅していた。そして明滅する光と同じく、色とりどりのケーブルやコードなどが差し込まれている。その漆黒の塊は俗にサーバーと呼ばれる主に電子情報の分析や収集、情報のコピーを保管したりする情報処理装置だ。

等間隔で設置されているサーバーを見ながら、タクミは小さく呟く。

「……まるで、ここは『墓地』だね」

前世では、よくお盆を迎えたら家族で先祖が眠る墓地へお参りに行った。その墓地はタクミが住んでいた地域の中でも、一際広い墓地で、たくさんの故人の名が刻まれた墓碑や墓石が置かれていた。ここはそれとどことなく雰囲気似ていた。だが祀っているのは故人の亡骸や霊ではなく、実体のない電子情報だ。

「どちらかと言うと、『墓地』よりも『冥界』という表現の方がよろしいかと思います。ご主人様」

タクミの呟きを聞いたバトラーが、薄暗い部屋の状況からユーモア

を交えてそう答えた。「おお、そう表現もあるね」とタクミ。

「ここが冥界であるなら……この主人である彼の事は『ハデス』と呼んだ方がいいのかね」とスカルフエイス。

『ハデス』って……確か、ギリシャ神話に登場する冥界の神様ですけど?」

スカルフエイスの言葉を聞いたタクミは、頭の中にあるうる覚えの神話の知識から引き出し、そう問い返す。

「ほう……これは驚いた。君には宗教的な知識もあるようだ。……そうだ、君の言う通り、ハデスはギリシャ神話に登場する冥界の王だ。冷酷で慈悲を知らず、死者の血を飲み干すとも言われ、昔から人々に恐れられてきた」

「(エツ!? 何それ、コワツ!)」

スカルフエイスの言葉を聞きながら、心の中で恐怖するタクミ。だが目の前の光景を目にし息を呑んだ。

「フフ、どうやら『ハデス』のもとに着いたようだ」と笑みを浮かべながら、スカルフエイスが言う。

彼らの視線の先には、壁に固定された女性の上半身があった。――正確には女性用義体の上半身である。その証拠にお腹の部分には大量の通信ケーブルやら電源ケーブルなどが差し込まれてる。そして上下可動式の台座に固定されており、たまたま上昇していただけで、壁に磔にされている訳ではない――その下には白衣姿の人間が数名おり、それぞれパソコンなどの各種情報端末に向かいあっていた。はたから見たらその光景は、キリスト教の救い主であるイエス・キリストが深い罪を負う人類を、その罪から救済するために、自ら身代わりとなつて磔になり、そしてその事実を知った信徒達が白装束に身を包み嘆き悲しんでいるように見えた。

そんな「信徒」の一人にタクミは声を掛けた。

「お疲れ様」

「わっ! す、すみません。た、タクミ様!」

突然、背後から声を掛けられた信徒はビクリとしたがすぐに振り返

り、つつかえながら挨拶をする。クセのないブロンドの髪を片口で切り揃えた綺麗な女性研究員だ。胸元につけている名札には『Drウイリス』と書かれている。

「あー、驚かせて申し訳ないです。えっと……彼の様子を見にきたんだけど。彼はあの中にいるの?」

目の前の白い義体を指差しながら、タクミはDrウイリスに聞く。「はい。すでに彼はなk「戻っている」ツ!」

Drウイリスが答えようとした瞬間、どこからともなく発せられた男の声が、彼女の声を遮った。声を聞いたDrウイリスは驚愕する。そして、すぐそばにいたスカルフェイスは、口元をニヤリとさせると、顔を見上げた。

「どうだったかね、この世界は?」

スカルフェイスの言葉を聞いたその白い義体はゆっくりと視線を彼に合わせる。

「この世界は、私がかつて存在していた世界と比べあまりが情報化が進んでいないようだ。それに北米大陸も私が記憶している南部の米帝、北東部の米露連合ではなく、アメリカ合衆国という連邦国家によって統治されている。そしてこの世界では人間の義体化率は皆無だ。……いたとしても戦闘による身体欠損を補助する為に義手や義足を装着している者達だ」

「ほう、あんな短時間でそこまでの情報を収集できるとは。最初はどのような事かと思ったが。……想像以上だ」

両手を広げながらスカルフェイスは目の前の義体を讚える。それに対し、義体の方は「心外だな」とでもいうように目を細める。

「私のネットや機能をもっと評価してほしい。それと最後に、ここにこうして戻ってきたのは私自身に意思だ」

感情がこもっていない機械特有の抑揚のない声で目の前の義体は語る。スカルフェイスと彼の会話を聞いていたタクミは、このままでは言葉をかけるタイミングを失うと思い、ここぞとばかりに小さく咳払いする。

「コホンッ、えー、ひとまずお疲れ様。『人形使い』」
「……」

『人形使い』、それは1995年に劇場公開されたアニメ映画『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』に登場する天才ハッカーの名前である。人類の電脳化やサイボーグ技術が飛躍した世界において、いとも簡単に他人の電脳に侵入、記憶を書き換え、その人間を自分の人形のように作り変えて操る手口から、作中の中でそう呼ばれていた。

だが、その正体は人間ではなく、日本の一部政府機関が『プロジェクト2501』という、外交において日本に有利な状況を作り上げる事を目的に開発されたAI（人工知能）だ。目的を達成する為に広大なネットの世界を彷徨い、膨大な情報に接してきた人形使いは、いつしか『自我』と呼べるものに目覚めてしまう。そして自分自身を『情報の海の中で生まれた新しい生命体である』と定義し、生命や人間といったものを理解するために他人の電脳をハッキングし始める。そして作中の最後に人間である草薙素子と融合し、「子孫を残し、死を得る」という生命体としての揺らぎを獲得。そして草薙素子と共に広大なネットへと旅立った。

「（僕が生まれる前に公開された映画だったけど、時代を先取りしていた素晴らしい映画だったなあ〜）」

前世で、携帯にダウンロードしていた映画配信アプリで、無料公開されていた映像を見た時に感じた感動を思い出すタクミ。なぜ、人形使いがここにいるのか。それは、彼もまたタクミによって、その高い電子戦能力を買われ実体化されたフィギュアだからだ。

「……私は君の願いを叶えた。今度は君が私の願いを聞いてくれる約束だ」

人形使いは、タクミをしつかり見据えてそう問い掛けた。

「うん、いいよ。僕に用意できるものなら」

ホワイトハウスへのサイバー攻撃を行う前に、タクミは人形使いから、「攻撃に成功したら、私の願いを叶えてほしい」と言われていた。

ちなみに幹部を務めるハメル、スカルフェイス、ターニヤの3人からも実体化した際に要望を受けている。ハメルは部隊司令官の地位、スカルフェイスは原作で自身が率いていた実働部隊『XOF』の再建とその独立行動権限、ターニヤは原作で自身が渴望していた後方職種である戦略後方支援局の創設と同組織のトップの地位などである。

「(人形使いは何を望むのかな？ うくん)」

タクミは頭を捻りながら考える。人工知能の彼は、人間である僕に一体何を求めるのだろうか、と。人形使いは、そんなタクミをガラス玉のような青い瞳で見下ろす。

そして、ゆっくりと自分の願いを語りだす。

「君は私という存在をよく理解しているだろうが、私は前の世界で、『自我』というものを手に入れた。俗にゴーストと呼ばれるものだ」「うん、知ってるよ」

人形使いの言葉にタクミはそう頷くが、心の中では、なんとも、小難しい話になってきたぞ、と頭を傾げる。だが周囲にいるバトレーとスカルフェイス、それと研究者であるDrウイリスは興味深々とばかりに耳を傾けている。

「全ての生命が太古の海から始まったように。私という存在も膨大なネットの海から生まれた、いち生命体だと定義している。だが、生命体と定義しても、今の私には子孫を残して、死を得るという基本プロセスが存在しない」

「(……ちよつと待て……この流れってまさかッ!!)」

人形使いの話を聞きながら、タクミは徐々に焦り出した。なぜならこの会話は前に聞いた事があるからだ。そしてタクミは、人形使いが次に述べるであろう言葉を予測する。

「……君が私をこの世界に召喚して以来、私は君を観察していた。善悪の価値基準、それを元にした君自身の選択と行動、行動によって生み出された結果に対する向き合い方など……。そして時折、君の中から発せられる不思議な現象も」

「不思議な現象 っって何？ 霊とか……オカルト的なもの？」

意味深なことを言う人形使いに対し、タクミは胡散臭げな目をし問

い掛ける。

「申し訳ないがその問いに対する適切な答えを、今の私は述べる事はできない。だがこれだけは言える。君と私は似た者同士だ。まるで、鏡を挟んで向かい合う実像と虚像のように……」

人形使いの言葉を聞いたタクミは思考する。

タクミは前世で、神様のミスというんでもない理由で死亡してしまった。そのお詫びという事で、特典付きでマブラブ世界に転生した。言うなれば、タクミという存在もまた人形使いと同じように、生命誕生というプロセスから逸脱している。

「〃神の悪戯ね。〃……」

思考の途中でボソツと、そう呟くタクミ。すると、これまで感情らしい感情を表さなかった人形使いが、笑みを浮かべる。

「これから君は、この混沌とした世界で多くの敵や障害に立ち向かう事になるだろう。望む望まぬに関わらず……。だが、君は年齢の割にとっても聡明だ。そのような君だからこそ頼みたい」

「……」

長々と意味深い言葉を喋り続けた人形使いが、ようやく自身の願いを述べる。だがタクミは、これから彼が述べるであろうその願いについて、大体の予想がこれまでの話の流れからついていた。

すつと目を細めるタクミ。

「ー君と融合したい。そう……『完全な統一』だ」

「なっ!!」

「ほう……」

「おおお！」

ついに人形使いが自らの願いを口に出し、その場から驚嘆の声が上がる。しかしタクミだけは何も言わず、ただ溜め息を吐く。そして心の中で、ここに来るまでにスカルフフェイスと会話した中で登場した神話の神の名を口にする。

「ーやっぱ『ハデス』だよ。あんた……」

第9話 策謀

第9話 策謀

へ1995年4月24日 ワシントンDC・ペンシルベニア通りへ

CIA（中央情報局）の準軍事工作担当官であるマット・ブローリンは、ペンシルベニア通りに面した一角にあるブラジル料理専門店の広々とした店内の角の席に座り、自身の好物であるシヤラスコを食していた。シヤラスコとは、ブラジルの郷土料理で鉄串に肉を刺し、じっくり炭火で焼いた肉料理である。肉好きであるマットの大好物だ。だが焼き上がる度にウェイターが回ってくるので、こちらが「ストップ」と言わない限り、いつまでも皿の上に肉を載せられる。

肉料理を食べる時間帯としては、だいぶ遅い時間帯だが、CIA社員として長年僻地で勤めている間に彼の胃袋はすでに鋼の如き強靱さを兼ね備えている。なので胃もたれなど気にする事なく、肉を次々に頬張る。

「よくもこんな時間帯に、ステーキを食べれますね」

肉をステーキナイフで切っていると、誰かに声を掛けられた。顔を上げ、その人物を確認したマットはフォークとナイフを皿の上に置くと、不愉快そうに両手のひらを擦り合わせながら睨みつける。

「誰のせいで、こんな遅い夕食になったと思う？ ん？」

食事を邪魔した人物、安全保障担当補佐官であるジェイク・カールツチは、マットの恨み言を気にする事なく、無遠慮に目の前の椅子に座る。

「状況は常に流動的です。刻々と変化する環境に、対応できる訓練は受けているのでしょうか？ ーあなたもラングレーの人間なら……」

「ふん」

そんな会話をしていると、ウェイターが注文を取りに来た。

「お客様、ご注文をお伺い致します」

ウェイターの言葉を聞いたジェイクは、目の前のマットから視線を外す事なく、「いや。すぐに出て行くから、気にしないでくれ」と答えた。その言葉を聞いたウェイターは一瞬訝しむも、表情には出さず丁

寧な一礼をする。そしてカウンターの方へ戻って行った。

「申し訳ありません。なにぶん色々立って込んでいるもので」

ジェイクは肩をすくめながら、そうマットに伝える。

「国連安保理を無視した海上封鎖、封鎖後の武装勢力側との単独交渉……。ふ、いつもながらの単独行動主義だ。そのうち、とんでもないしっぺ返しをくらうぞ」

CIAの担当官として数多くの国で諜報活動を行ってきたマットは、自身の経験から今回のアメリカが取った行動を皮肉る。

未知の島である『シルトクレーテ島』がこの世界に突如出現し発見された直後、アメリカはすぐさま国連安保理の決議を待たずに単独での当該海域の海上封鎖を実施した。この強行措置に対し、各国からはもちろん非難の声が上がったが、アメリカ政府はこれを一蹴。そしてホワイトハウスの報道官は会見でこう言い放った「これは戦争を目的とした『海上封鎖』ではなく、未知の島による周辺環境への影響を最小限にするための『海上検疫』であり、もし我が国の迅速な行動がなければ、当該海域は深刻な環境汚染に晒されていただろう」と。

マットの皮肉を気にする事もなく、ジェイクは淡々と答える。

「時には大胆な行動も必要です。だいいち、そのおかげで、あの島の武装組織『レイブズロック』との接触に成功しました。そして、海上封鎖を解く代わりに、彼らは今後48時間は軍事行動を起こさない、という条件を伝える事ができました」

「ハツハツハツ。さすがワシントンの人間は、言葉遊びが上手いなあ。なあ……それを世の中でなんと言うか知ってるか？　『詭弁』『二枚舌』って言うんだぜ」

マットはこれまで数多くの『非正規作戦』—アメリカ政府にとって敵対的な人物を秘密裏に誘拐、暗殺もしくは、非友好的な政府をクーデターなどによって『排除』するなどの、俗に言う『ブラックオプス』に関わってきた。マットにとって、この経験は、単一の目的—BETA大戦及び、大戦終結後の世界秩序構築—を達成するためならなんでもやるというワシントンの姿勢を、いやというほど認識させられた。

だがジェイクは、会うたびにいつもそんな皮肉を言うマットにうんざりしている、とでも言うように右手を顔の前で払う。

「はあ……馬鹿正直に世界に対し、「あの島にはアメリカ全土を射程圏内に収めるICBMが存在します」とでも言えと？ そんな事はナンセンスですよ。それよりも、さあ、今すぐ『荷物』の状況を教えて下さい」

ジェイクの、その急かすような口調に若干の苛立ちを覚えるマット。だが店内で大声を上げる訳にもいかず、代わりにナプキンで口元を乱暴に拭う。そして「チイ」と小さく舌打ちをすると、『荷物』の説明を始めた。

「頼まれた日本人形についてだが、数は全部で〃200体〃。もちろん純正品だ。ーのだが、なにぶん『注文主』が急遽、予定を変えたもんだから、人形の一部に問題が出てる」

問題、という単語を聞いたジェイクは、すっと目を細める。

「〃問題〃？ それは対処可能なのですか？」

「おお、怖エ。心配せずともすでに問題への対処は完了してる。完了してるから俺はこんな時間に、ここで夕飯を食ってんだよ」

マットの説明を聴き満足したのか、ジェイクは大きく頷く。そしてテーブルに身を乗り出す。

「さすがですよ、マット。これで『注文主』も安心できます」
「……」

「では、配送料はいつもの如く、パナマの口座に振り込んでいますので。確認をよろしく」

そう言つて、ジェイクは立ち上がり、その場から立ち去ろうとした瞬間、マットが声を掛けてきた。

「なあ、最後に忠告するが。今回は、この間のグアテマラとは何もかも違うぜ？」

その忠告を聞いたジェイクはゆっくりと振り返ると、ニヤツと笑つた。まるで、そんな質問をするマットに呆れているかのよう。

「宅配トラックの運転手が荷物を気にするのは、その荷物が注文主の元に届くまでで、その後注文主が荷物をどうするかは、預かりしらん

と思うのですが？」

「まあ、そうだな」

「確かに仰るとおり、今回は以前のグアテマラとは全く違います。ただし、〃いい意味で〃ですよ。なんせ目と鼻の先に空母が展開してるんですから。あと、あの時と違うのは、諸外国への面倒な根回しが必要ないところですかね。フッフ……」

「……」

ジェイクの言葉を聞いたマットは何も言わず、かわりに服の着心地が不快であるかのように激しく肩を回す。それを見たジェイクは今度こそ足早にレストランを出て行った。

ジェイクが出て行った扉をしばし見つめていたマットは小さな笑い声を上げながら、首を横に振る。そして、小さく毒ずいた。

「若造が……」

〈日本帝国・京都上京区・煌武院家大広間〉

日本帝国において、皇帝陛下より国事全権を任される『征夷大將軍』。その役職は、昔から『五摂家』と呼ばれる五つの有力武家の当主達が拝命してきた。その五摂家の一角、『煌武院家』の当主である煌武院悠陽（こうぶいん ゆうひ）は、大広間の上座に座り、自身の目の前に座る男からの報告に耳を傾けていた。

「では、アメリカはあの島の海上封鎖を解除すると？」

男の報告を聞いた悠陽は、そう問いかける。

「ええ、本土にいる私の友人からはそう聞いております。ただホワイトハウスとレイブンズロックとの間で、どのような取り決めが結ばれたかは不明です。何せ、交渉は全てホワイトハウス地下のシチュエーションルームで行われており、同じ政府内ですら極秘事項として扱われています。」

帝国随一の諜報員である、帝国情報省外務2課所属の鎧左近（よらい さこん）は肩をすくめる。諸外国から『帝国の怪人』と恐れられ

る彼の力を持ってしても、ホワイトハウス内の動向までは知る事はできなかつた。

「かの者達との間で、どのような取り決めがあつたとしても、戦の危機が去つたのは確か。今は人類同士で相争つている場合ではないのです……」

鎧の報告を聞いた悠陽は、この一週間世界の人々が恐怖していた戦争の危機が消えた事を心の底から喜ぶ。

彼女の言う通り、世界の目は、太平洋に突如として出現した未知の島である『シルトクレーテ島』に注がれていた。それはBETAが初めて人類に発見された時以来の衝撃と興奮だった。だが、その数日後アメリカの偵察衛星が、島の内陸部にて重火器で武装した兵士並びに複数の軍事施設が存在している事を確認。当初の衝撃と興奮は、一気に驚愕へと変わった。直後アメリカ政府は第7艦隊による海上封鎖を実施し、事態は一気に軍事的緊張をおび始めた。国連並びに、環太平洋地域の国々は「国連安保理決議による事態解決」をアメリカ政府に伝えたが、ホワイトハウスはこれを拒否。アメリカは単独での事態解決に乗り出す、との声明を発表。

アメリカ軍と武装勢力間の衝突がいつ発生しても、おかしくない状況に人々は恐怖した。しかし、事態は急変する。昨日アメリカ合衆国大統領が緊急の会見を開き、大統領自ら「シルトクレーテ島の武装勢力である『レイブンスロック』との、今後48時間の双方武力不行使及び、近いうちに会談の場を設ける事に同意した」との声明を発表し、事態は緊張緩和へと向かっている。

「しかし、私はあの国が何もなく、ただ引き下がるとは思えませんなあ
〜」

「どういう意味です？・鎧」

この数時間の間で突如、対立姿勢から融和姿勢へと変化したアメリカ政府の行動を訝しむ鎧。その鎧の言葉を聞いた悠陽は首を傾げながら、その言葉の真意を問う。

「米国とかの者達との間で、いかなる仕儀があつたにしろ、交渉によつて互いの妥協点を決めた。だからこそ、米国は封鎖を解くのではない

のですか？」

年若い当主である悠陽の言葉を聞いた鎧は「ハツハツハ」と愉快そうな笑い声をあげると、長きにわたり世界各地で諜報活動を行ってきた者としての見地から、自身が米国の行動を訝しむ訳を語り出した。「御館様。アメリカという国は自国の権益を守る為ならば、どのような手段も躊躇なく実行する国なのです。例えその手段が人道に劣る物だとしても……」

「……」

鎧の言葉を聞き、思うところがあるのか悠陽は悲しそうに顔を俯かせる。

幼少期から、煌武院家の人間として相応しい教養と知識を習得する為、各界の専門家から多くの事を学んだ。もちろんその中には現職の外交官や軍人などもおり、彼らからBETA大戦下における各国の詳しい政治情勢をつぶさに教えられた。

幼きながらも、その時感じたのは、BETA大戦が勃発してから、すでに30年以上の月日が経過しているにも関わらず、互いに協力しようとならない政府の傲慢さと、他者を信じる事ができない人類の深さだった。そしてそれを知り、どうする事もできない己が無力さも同時に痛感した。

「1983年の話です。私はその頃、中米のグアテマラでコーヒーの買い付けを行っておりました。グアテマラという国は、良質なコーヒー豆を産出する自然豊かな小国でして……コーヒー好きには非常に有名な国なのです。そして中米という、北米大陸と南米大陸とを繋ぐ地理的条件から、アメリカはもちろんの事、BETA禍から逃れてきた欧州諸国からの投資もあり、そのおかげ当時は急速な発展を遂げていました。」

突然鎧は、まるで子供時代の話をするかのようなゆったりとした口調で語り出した。

「しかし、その急速な経済発展は、アメリカと強力な繋がりを持つ政府と、多国籍企業がグアテマラ国内の至る所に建設したプランテーションで奴隷の如く扱われる国民によって支えられていました」

「そこで生み出された莫大な富は、国民に還元される事はなく、全て搾取された、と……」

悠陽の呟きを聞いた鎧は、弱々しい笑みを浮かべながら、その呟きを肯定する。

「ええ、仰る通りです。しかし、自分達が生み出した富が、力づくで略奪されているのを黙って見ていられるほど、グアテマラの国民は愚かではありませんでした。そして、1983年に行われた総選挙で民衆の強い支持を得た左派勢力が地滑りの勝利を獲得。政権交代に成功しました」

「なんと、それは」

まるでおとぎ話の英雄譚の如き話の展開に、悠陽は目を大きく見開きながら驚きの声をあげる。実際、彼女が驚くのは無理もない事であった。

グアテマラが存在する中南米というのは、人々から「アメリカの裏庭」と揶揄されるように、アメリカからの政治的、軍事的干渉が非常に強い地域だからだ。

「ハッハッハ。まさに今の御館様と同じく、当時の世界も驚きに包まれました。何せ世界初の民主的な選挙による社会主義政権が中米に誕生したのですから……」

普段あまり感情を表に出さない飄々とした雰囲気、鎧が珍しく興奮気味に話す姿を見て、悠陽は、（鎧が当時、グアテマラにいたのは、それを調査していたからでは？）と考えた。

「しかし、鎧。私は、かつてグアテマラでそのような出来事があった、という事を教えてもらった記憶がないのですが？」

「御館様がご存知ないのは仕方がありません。何せその出来事は『意図的に闇に葬り去られた』のですから……」

「ッ！ それは一体どういう……」

「先ほども申した通り、グアテマラが存在する中米は、北米と南米とを繋ぐ結節点、いわば〴〵その緒〴〵です。そのような非常に重要な場所に、社会主義国家が建設されようとしている。それはすなわち、南北アメリカの分断を意味しました。生産、流通、軍事戦略価値すべてを

失うという危機に直面したアメリカは、CIAを使い、グアテマラ国内で「ある作戦」に着手しました。そしてその作戦は見事成功しました」

「鎧……アメリカはあの地で、一体何をしたのですか」

先ほどとは打って変わった冷たい言葉で語る鎧。その言葉には、うまく言い表せないほどの恐ろしい何か感じさせられる。しかし、悠陽は話をやめさせようとはしなかった。彼女自身、この話の結末を知りたがっていた。

そして、鎧は気持ちを落ち着かせようと目を閉じた。あの時、自分がグアテマラが見聞きした事は今でも、脳裏に深く焼きつき、まるで地獄のような出来事をまるで昨日の出来事のように鮮明に思い出す。

「ーグアテマラの新政府及び、それを支持する市民を標的としたCIA主導の『大量虐殺』及び情報工作です」

「そ、それは明らかな国際法違反ではないのですかッ!」

『大量虐殺』という国際法違反であり、多くの無辜の民の命を奪う非人道的な犯罪行為である言葉を聞いた悠陽は、怒りの声をあげ、手を震わせる。

「はい。……CIAが主導したその一連の作戦のコードネームは『Harvest Program<収穫作戦>』と呼ばれ、グアテマラ国内の右派勢力を扇動し、国内を意図的に無政府状態化に陥らせ、軍部による戒厳令を布告させる。言い換えるならば、軍事クーデターを目的とした作戦でした」

「……」

「そしてアメリカの思惑通り、作戦は成功。誕生間もない左派政権は、国内の騒乱に対処できずに崩壊。軍部は事態を沈静化させる為の戒厳令を布告。そして暫定政権として当時の陸軍参謀総長を頂点とする国家評議会が成立しました。その後、暫定政権は米州機構にも治安維持部隊の派遣を要請。この要請はアメリカの力ですぐに受理され、アメリカ陸軍戦術機部隊を中核とした多国籍治安維持部隊が派遣されました」

「そして大量虐殺は実行され、その事実がアメリカによって封殺され

た……」

「ええ。この結果グアテマラは軍事独裁政権となり、再びアメリカの勢力圏へ戻ってきました。詳細は不明ですが、この騒乱の中で発生した死者・行方不明者はグアテマラ全土で、推定約7万人ではないかと思われております」

「なんと愚かな事を……すでにBETAによる侵攻で人類の半数が死に絶えていると言うのに、それを手にかけるとは……」

やはり、人と人は分かり合えないのか？

同じ星に住む友人として、共に歩めないのか？

考え方が違うというだけで、人を攻撃するのか？

現状を維持する為なら、可能性すら潰すのか？

悠陽の心の中に多くの想いが去来しては、強く胸を締め付ける。

しかし、彼女は知らない。これから起こる出来事を……。そしてその出来事に、『日本帝国が巻き込まれる』ことを……。

第10話 Operation Great Discovery (偉大なる発見作戦)

第10話 Operation Great Discovery (偉大なる発見作戦)

〈1995年4月25日 アメリカ国防総省〉

国家安全保障担当補佐官のジェイク・カールツチという男は、アメリカ中西部の北、カナダと国境を接するミネソタ州で弁護士事務所を経営する両親のもとに生まれた。大学では政治学の学位を取得、卒業後はロー・スクールに入り、弁護士に必要な資格を取得する。そして地元へ戻り、新人弁護士として活動していた頃、政治資金を得る為、たまたミネソタを訪れていたジョン・レーガンの政治資金パーティーに参加した。

パーティーの参加者達に、シャンパンを手若い弁護士ながらも国内外の情勢、BETA戦におけるアメリカ外交などを熱く語っていたジェイク。そんな彼は、すぐさまレーガンの目に留まった。そして少しばかり今後の世界情勢の展望を聞いたレーガンは、彼を自身の政治顧問とした。

こうして、ジェイクは政治の世界に足を踏み入れ、今では歴代政権の中で一番若い国家安全保障担当補佐官の地位に就いている。

そんな彼は、『極秘資料』が入った黒のブリーフケースを手にも、バーニア州にあるアメリカ国防総省の綺麗に磨かれた廊下を歩いていた。

通称「ペンタゴン」と呼ばれる国防総省はエンパイア・ステイトビルの実に三倍の床面積があるにもかかわらず、特徴的な五角形の構造のおかげで移動そのものは短くすむ。いくつもの厳重な保安ゲートを抜け、ジェイクは会議室が集中しているエリアに入った。それぞれの会議室のドアのプレートには、様々な委員会の名が掲げられている。

——『ルワンダ問題介入準備会』

――『中南米安定化委員会』

――『極東情勢分析委員会』

――『難民問題検討委員会』

――『対BETA戦術策定委員会』

BETA大戦、それによつて発生した各種問題など、現在世界が直面する問題が、ここペンタゴンの会議室が集中するこのエリアで話し合われ、問題に対する高度に政治的、軍事的な対応を含むあらゆる解決策が日々決められている。

アフリカの主権国に『介入』するなど、常識的に考えたら完全な内政干渉、大きな迷惑というやつだ。だが、ここにはそんな外交的『倫理』など初めから存在していない。

それらエリアのなかにひとつだけ、単に『立入禁止』とだけ表示された会議室の扉の前で、ジェイクは足を止めた。そして中に入るため、扉をノックしようとしたが、そのまま振り返り他の会議室の扉を見渡す。

「『立入禁止』――他と比べてずいぶんシニールな話題だ……」

世界の立入禁止の問題を処理するのは、この国の義務だからな、と肩をすくめる。そして扉をノックすると、室内から男の声が出た。

「カードをかざしたまえ、デバイスは扉についてる」

トランプカードぐらいの黒色の読み取りデバイスに、入館時係員から手渡されたカードをかざす。ロックが解除された事を確認し、ドアノブを回し、扉を奥に開く。

――真っ黒にした部屋で、男達がポルノビデオを観ている。

というのが、ジェイクが部屋に入った時に感じた第一印象だった。壁面スクリーンに映っているのは、東洋人の男達で、壮年の男達が見入っていたが、扉の開閉音に気づき全員の視線がジェイクの方を向く。暗闇に目が少し慣れてきたおかげで、座っている男達の顔がぼんやりと見えた。

「大統領補佐官、遅かったじゃないか？」

「申し訳ありません、国防次官。『注文主』……いえ、『大統領』の作戦許可を得るのに手間取りまして」

スーツを着たD I A（国防情報局）の次官を務める男の言葉に対し、ジェイクは苦笑いしながら弁解する。そして最後に手に持っていた黒のブリーフケースから、大統領のサインが記載された作戦計画書の束を取り出す。

テーブルに置かれた作戦計画書の束を見たD I A次官は、中身を確認する事はなく、代わりに「そうか。許可を貰えたか。では、早速始めよう」と告げた。

空いている椅子に座ったジェイクは、テーブルについている男達を確認する。皆いずれもそれなりの年齢で、ここではジェイクが一番の若造だ。そしてテーブルに着席しているのは、C I A、N S Aなどアメリカの情報コミニティを構成する各機関の次官級、上院情報活動監視委員会の議員数名、それと制服を着た軍人達だ。

まず初めに情報担当のC I A局員が説明を始めた。

「スクリーンに映るこの男達は、日本帝国最大の国粋主義団体『皇国の旅団』の構成員で、今回の『シルトクレイテ島侵攻作戦』における。米軍介入の口実を作るため、最初に島に上陸する。『日本人形達』です」

「日本人形」という言葉を聞いたD I A次官は笑い声を上げる。

「ハッハッハッ。『日本人形』とは、……『捨て駒』の間違いじゃないのかね？」

「そういう表現もできませんね。実際、旅団の役割は、島に上陸し、レイブンズロックに攻撃を仕掛け、島を混乱状態に陥れる。つまり『米国が軍事介入しなければならぬ状況を意図的に作り出す事』です」

C I A局員は、D I A次官の問いにそのように答える。だが説明を聞いていた陸軍大佐が疑問の声を上げる。

「しかし軍事介入の決定まで、コイツらは戦えるのか？」

軍人である大佐からすれば、いかに皇国の旅団の連中が、自分達の事を『旅団』と名乗ったところで、実際は一般の日本人より愛国心が強い日本人でしかない。いわば戦闘の素人だ。

そんな連中で果たして戦闘が行えるのか、と心配する。

「皇国の旅団の創設者である男は、貿易業で成功した裕福な帝国”外様武家”の者でして、事業で築いた財力を使い、帝国軍や斯衛軍の上

層部と個人的繋がりをかねてより構築していました。それを利用し、今回参加する構成員達には事前に軍事訓練を施しています。ですの
で、軍事介入までは戦えられるかと……。もちろん、戦闘が継続できる
よう大量の物資と共に送り込みます。持ち込む武器は、全て帝国軍が
保有する物です」

「帝国軍の武器、だと？ 武器庫から装備品が消えたとなれば、日本政
府に気づかれてるのではないか？」

C I A局員の説明を聞いた陸軍大佐は目を大きく見開きながら、そ
う問い返す。

軍の武器庫から装備品が消えたとなれば、当局による捜査が行われ
るはずだ。もしそうなれば日本政府に、今回の作戦情報が漏れている
のでは、と心配する。

だがそんな懸念は、最初から想定済みとばかりに、C I A局員は顔
に笑みを浮かべながら答える。

「大佐、ご心配には及びません。あの国は先の大戦終結後に、我々C I
Aが作り上げた“人工国家”みたいな存在です。軍部、情報機関、行
政機関、民間企業などの至る所に我々の協力者がおり、我々の諜報活
動に必要なあらゆる物が詰まった。いわば“おもちゃ箱”ですよ。
今回使用する軍用品も、フィリピンに疎開した日本メーカーの製造工
場から直接入手しました。もちろん、管理記録などにも残っています
ん」

「83年のグアテマラ軍事クーデターが成功したのも、あの国のおか
げだ」と議員の一人が言った。その声を聞いたC I A局員は頷く。

「ええ、仰るとおりです。1983年に我々C I Aがグアテマラで実
行した『Harvest Program〈収穫作戦〉』の際には、右
派の準軍事組織A U G（グアテマラ自衛軍連合）、グアテマラ国軍が使
用した軍用品は、第三国である日本帝国で製造、それを我々のダミー
会社がグアテマラへ輸送しました。当時、下院議員だったアーサー・
トランブル氏が草案を作り、成立させた『グアテマラ人道支援法』に
よる事実上の武器禁輸で、アメリカからグアテマラへの直接的な武器
支援ができなかったからです。しかし、皮肉でしょうか。当時の下院

議員が、今は「下院議長」ですよ」

推定約7万人にも及ぶ、死者・行方不明者を発生させた原因を作った組織に所属する男は、まるで新入社員時代の苦労話をするかのような軽い感じで語った。そして議員は、腕を胸の前で組み、鼻息荒く、当時のアメリカ政府が選択したグアテマラ政策を平然と擁護した。

「あの時、我々が介入していなければ、グアテマラを手始めに、ドミノの倒しと同じくホンジャラス、エルサドバドル、ニカラグアなどの国々は共産主義化していただろう。そうなれば最後、世界の対BETA戦略は大きく後退していたはずだ」

それを黙って聞いていたジェイクは、話が脱線しかけていたため、両手をパチパチと叩き、話の主題を元に戻す。そして笑みを浮かべる。

「皆さん。グアテマラでの出来事を振り返るのは、そこまでにしてください。今度の敵は『コミニユスト』ではなく、『異世界人』なんですから」

そのジョークを聞いた男達は笑い声を漏らす。

「それと、その下院議長は今、我々が大統領と共にシチュエーションルームにいます。つまり作戦開始時には、すべてを目撃する事になるのです。トランブル下院議長は軍部や情報機関に対して、とても厳しい姿勢であるのは、皆さんご存知でしょう？」

ジェイクのその言葉を聞いた男達は、忌々しいとばかりに顔を顰めたり、不満とばかりに手で顔を覆う。そんな彼らの姿を見たジェイクは笑みを浮かべると、席から立ち上がり、ゆっくりと歩き出す。

「BETAの地球襲来は、人類史上最大の悲劇でした。

しかし、地政学的見地に立てば、『アメリカ史上』これほど素晴らしい条件はありません！

BETAがユーラシアを蹂躪した事で、核大国であったソビエト連邦、最大の人口大国である中国とインド、そして東欧の共産国家群は地図から完全に消失。もはや跡形もありません。

泥沼と化したBETA大戦にユーラシア諸国が苦しんでいる間、合

衆国の経済は飛躍的發展を遂げました。軍事・科学技術の面でも同じくです。

だが、長引くBETA大戦による自然環境の激変、資源の枯渇、増え続ける難民。そして各地で多発するテロによって、世界はますます本来あるべき姿を見失いかけています。

この世界に必要なのは、新たな世界規範と秩序。そして、それらを担保する事ができる『力』を持った存在。

そう。——アメリカだけがBETA大戦に勝利する事ができるし、大戦終結後の新世界を創造する権利を持つ」

ジェイクは会議室内をゆっくりと歩きながら、BETA大戦勃発後の世界情勢と人類が直面する課題、そしてそれらを解決する事ができるのは、アメリカだけなのだ、言葉の強弱をつけながら、彼らに語り続ける。まるで、その光景は、宗教家が信徒達に説法を説いてるかのようだ。

「突如として、太平洋に出現した未知の島『シルトクレーテ島』、この世界とは異なる技術概念で製造された戦術機を保有する武装組織『レイブズロック』。この二つは今後、世界の運命を大きく変化させるでしょう」

ついに壁面のスクリーンまで到達したジェイク。タイミングよく画像はシルトクレーテ島と、その島に存在する未知の戦術機を映し出す。それらの画像をバックに、両手を大きく広げる。まるで舞台役者のように。

「これらを手に入れる事で、アメリカは更なる発展と繁栄を遂げるでしょう」

その瞬間、会議室は拍手喝采に包まれた。そしてジェイクは高らかに宣言する。

「オペレーション・Great Discover (偉大なる発見)を開始するッー！」

これから行われる作戦名を聞いた男達は立ち上がり、会議室は更なる歓声と歓喜の渦に包まれる。ジェイクはゆっくりと振り返ると、レ

インブズロックの紋章である漆黒のカラスを見つめて、小さく呟いた。

——新世界へようこそ、と。

第11話 嵐の前の静けさ

第11話 嵐の前の静けさ

〈北太平洋上・帝国海運『秋津丸』甲板〉

月明かりが照らす北太平洋。波穏やかなその海に、日本帝国の海運会社である帝国海運所有の貨物船『秋津丸』が停泊していた。

その甲板では、日本帝国最大の極右組織『皇国の旅団』の構成員たちがこれから数時間後に行われる上陸作戦の準備を終え、甲板に整列していた。

全員の手には、日本酒が注がれたお猪口が握られている。

「同志たちよ。今日これから行われる作戦は、我らにとって、いや、日本帝国」にとつての大きな飛躍となるー」

背後に掲げられた旭日旗と、帝国旗の前に立つ男。皇国の旅団の総帥『狭間是清へはざまこれきよ』は、目の前に並ぶ部下たちの顔を見ながら言葉が続ける。

「先の大戦終結以降、歴代の指導者は我々を西洋諸国に売り渡してきた。古から連綿と紡がれてきた固有の文化を壊し、政治経済を疲弊させ、民族の誇りすらも売り飛ばした。そしてBETA大戦、人類救済の名の下、帝国の多くの若人の血が流されたー」

「……ッ」

その言葉を聞いた何人かが悔しそうに唇を噛む。

旅団には、これまでのBETA戦争で戦死した帝国将兵の親類や友人が何人かいる。是清の言葉を聞き、脳裏に愛する者の顔がよぎったのか、彼らの何人かは目頭を押さえている。

「しかし、かの者たちが捧げたその尊き犠牲に対し、軍と政府は何も与えず、答えず、挙げ句その事実を隠蔽しようと試みている。そして、我らの精神的支柱である皇帝陛下、国事総代であられる政威大將軍の権威を侵犯し、それを我が物としようとしているッ！」

日本帝国は、皇帝から任命された『政威大將軍』が国事全権を取り仕切ってきたが、1944年の大東亜戦争の終結と敗戦、そしてBETA侵攻による日本列島の最前線化などの地政学上の変化により、こ

れまで立憲君主国の元首の地位にあつた政威大將軍は形骸化、代わりに本来それを補佐すべき議会と軍部による將軍の權威を利用した独断専行の色合いが非常に強くなっている。

「そして、嘆かわしいことにツ！ 五撰家の一角である焰武院家は恥知らずも若輩の女子を自分たちの当主に据え、これまでの撰家責務を放棄しようとしている！ これはもはや帝国に対する『反逆行為』に等しいツ!!」

50代半ばの是清、これまで由緒ある外様武家『狭間家』の者として陛下と殿下に忠誠を捧げて来た。

滅私奉公を戒めの言葉として、己を律し、武家の責務を忠実に果たしてきた。

それもこれも全ては皇帝陛下と將軍殿下が治める帝国の繁栄と、その国体を護持するためであつた。

――武家の矜持は、一体どこへ行つたのだツ!!
彼の黒き瞳に怒りの炎が宿る。

武家は、民の範たるべし……。

確かに世間と同じように、それまで男社会であつた武家の世界でも、昨今のBETA大戦の激化による衛士不足という状況のために、武家の若い娘たちも衛士養成所で訓練を受けさせている。

国を守護する、それは武家の人間にとつては『義務』であり、『名誉』ですらある。だが、本来女子のあるべき姿とは、子を産み育て、血を絶やささないことである。当主不在の間は『慎ましく』、家を守りそれ以外のことは全部男に任せていればいい。

そのような『保守的』価値観を持つ彼の目には、最近の五撰家は、男女平等の美名を隠れ蓑に、これから起こるであろう国難から逃げようとする『軟弱者』、そう映っていた。

「軟弱な者たちによつて、帝国は変わってしまったア!! 今こそかの島を手に入れ、それを足掛かりに我らの手で、強い帝国を取り戻すのだツ!!」

是清は力強くそう言うと、手に持っていたお猪口を掲げる。それを見た他の構成員たちも同じように雄叫びを上げながらお猪口を掲げ

る。

「帝国万歳!!」

「皇帝陛下万歳!!」

そう叫んだ彼らはお猪口に注がれていた日本酒を一気に飲み干し、思いつきり甲板に叩きつける。

部下たちもそれに倣う。

そうだ、これは革命なのだ。帝国に救う売国奴たちを一掃し、自分が陛下と殿下の「忠実な臣下」となり、腐り切った武家社会を一新する。そしてそこから帝国を繁栄へと導く。

目の前で雄叫びを上げる部下たちを見ながら、是清は、これから自分が歩む運命に思いを馳せる。この作戦が成功すれば、彼は「協力者たち」の手で、帝国内で然るべき地位に就くことが約束されている。

そして、その後の「支援」も……。

――万事抜かりはない、これは天命なのだ。

部下たちに激励の言葉を送り、満足した是清は、幹部たちを引き連れ、作戦の詳細を打ち合わせるため船内へ戻っていった。

その顔に醜悪な笑みを浮かべながら……。

――シルトクレーテ島・秘密地下基地『アガルタ』作戦司令部

シルトクレーテ島の地下深くに突貫工事で建設された地下秘密基地『アガルタ基地』。完成していないとはいえ、この基地は極めて効率良く機能していた。

その基地の奥深くに設けられた戦術司令センター。その部屋は、コンピュータ、通信機器、一面に設置された平面スクリーン・モニターなどがあるので、室内の気温は少し肌寒いくらいに冷やされている。タクミはそこで、ハメルとスカルフエイズと一緒にスクリーン・モニターに映された貨物船の甲板にいる「奇妙な出立ちの男たち」をじっと見ていた。

男たちが船内に戻り出したのを確認し、タクミが口を開く。

「この人たちは？」

まるで不思議なモノを見たような顔で、情報担当のスカルフエイズ

に問いかける。スカルフェイスはハットの帽子を高らかに掲げながら答える。

「どうやら、この『ゲーム』に参加した新たなプレイヤーのようだ。彼らは……」

「はあ？ どういうこと？」

その言葉を聞いたタクミは首を傾げる。ハットを被り直したスカルフェイスが言葉を続ける。

「ここ数日、我々情報部はこの付近の情報収集を積極的に行っていたのだが、ここにきて米軍が使用する無線とは違う周波数帯を傍受するようになった。気になった我々は、人形使いの力を借り、その周波数の暗号を解読。発信元を追跡したら、その貨物船に行き着いたという訳だ」

「なるほど。それで正体はわかったの？」

「残念ながら衛星からの監視には限界がある。彼らが一体何者なのかは現時点では不明だ。だが暗号通信を使用していることから、米軍もしくは他国の情報収集艦だと思いがね」

スカルフェイスの言うように、米軍が実施している海上封鎖の外側では、少しでも未知の島についての情報を手に入れようと躍起になっている各国の政府や報道機関の船舶が多数確認されている。

タクミがどうするかと頭を抱えていると、部隊司令であるハメルが口を開く。

「閣下、情報収集艦も懸念事項ですが、現状一番の懸念事項は米軍の動きです。ご覧下さい」

ハメルはそう言うと言席を立ち、スクリーンに表示されている米艦隊をレーザーポインターでマークする。

「48時間の停戦が発行してからの米艦の動きを監視していますが、一部の駆逐艦やフリゲート艦を残し、海域から離脱しています」
「停戦中だから撤退してるだけじゃないの？」

ハメルの説明を聞いたタクミは、首を傾げながらそう問う。

ターニャのものはや脅迫に近い交渉によって、アメリカとの48時間の停戦が実現してからすでに30時間が経過している。その間、アメ

リカ側は戦術機母艦セオドア・ルーズベルトをはじめ、多くの艦船をシルトクレーテ島から撤退させていた。今では海上封鎖線を監視するための、数隻の駆逐艦やフリゲート艦しかない。

最初タクミは、アメリカ側のこちらに対する信頼の証だ、と考えていたがハメルの険しそうなその顔を見る限りどうもそうではないようだ。

「撤退した艦船は現在、この地点に再度集結しています」

と言つて、ハメルが示したのは、この島から南の海域だった。

「偵察衛星で確認したところ、新たに大型の輸送船などが合流し、補給活動を実施しているのを確認できました」

「司令。もしかして、アメリカがこつちに何かしてこようとしてるって思ってます?」

「ええ、可能性はあります」

「はあ〜」

ハメルの説明を聞き、タクミは頭を抱える。

実際、ハメルの懸念も分かる。前世のアメリカも実際そうだ。ベトナム戦争やイラク戦争などアメリカが行ってきた全ての戦争で、何かしらの情報操作または工作活動などが開戦前に行われている。

「港からこつちの艦船を出航させるのは?」

攻撃に備えて港に停泊中の艦船を出航させてみてはどうかと、タクミはハメルに言ってみるが、ハメルは首を横に振る。

「いえ、それは得策ではありません。もしこちら側が何かしらの行動を取れば、アメリカ側が何をしてくるかわかりません。もしかすれば、彼らはその時点で停戦が崩れたと判断し、攻撃してくるでしょう」「そうですか……。ではどのように対応しますか?」

「不審貨物船及び米艦の動きに嚴重に警戒するべきかと、なお幸いなことに海上封鎖線の外には、我々のUSSフロリダ(SSGN-728)とK335ゲパード(アクラ級)がいます。もし最悪の事態になれば、この2艦を使い、反撃を実施します」

「……」最悪の事態、なんていやだよ。僕は」

そう言つてタクミは鼻の付け根を軽く揉む。そんな彼の姿を見ながらも、ハメルは毅然とした態度で言葉を述べる。

『悲観的に準備して、楽観的に対処する』これが私のモットーです、閣下」

〈北太平洋・米軍集結地点アルファ・ポイント〉

第26海兵戦術機甲群所属の衛士であるリリア・シエルベリ少尉は、輸送船の欄干から静かな夜の海を眺めていた。

彼女が所属する部隊は、もともとフィリピンで展開していたが、突如として出現した未知の島『シルトクレーテ島』への対処のためここ米軍集結地点 ッアルファ・ポイント ッに派遣されていた。

「シルトクレーテ島……カメの島、か。どんなところなんだろう……」

海を見ながら彼女は、ドイツ語でカメを意味する島の名前を呟く。

第7艦隊の増援としてマニラを出航してからここに来るまで、艦内は未知の島に関する噂話でいっぱいだった。

——島を占拠する武装集団『レイブンスロック』。彼らもまたキリスト教恭順派の仲間でテロリストどもだ、とか……。

——オカルト好きの同僚は、彼らは異なる次元から私たちを救うためにやってきた異世界人とか。

——信心深い同僚は、彼らはこの世界を救うため、神に遣わされた人々だとか。

——これは第3次大戦の始まりだ、とか。

「……」

これまでに聞いた話を思い出し、憂鬱気な顔になるリリア。

リリアはもともと北欧の国ノルウェーの生まれだ。だがBETAの侵攻によつて故郷を失つてからは、避難先である米国の市民権を得るためにこうして海兵隊員として軍役に就いている。だがもともと争いを好まない優しい心の持ち主である彼女は、このまま何事も起こらず済めばいいと願う。

「どこから来たとしても、同じ 人間 なんだから……」

彼女の部隊はQ R F（緊急即応部隊）として、数時間後にシルトクレーテ島に展開する手筈になっている。もし戦端が開かれれば真っ先に出撃する部隊だ。

「私が衛士になったのは、B E T Aからこの世界の人々を守るためよ」

もし彼らが攻撃してきたら、それはこの世界に対して敵対したということ。であればそれはB E T Aと同じだ。リリアはそう思うが、それでも気持ちは揺らぐ。

「何も起こらなければいいな……」

そうこの世界にはもはや新たな戦争をやる余裕などすでない。人類はすでに種の絶滅という破局の一步手前にいるのだ。

リリアは大きく深呼吸する。肺いっぱい潮の香りを吸い込む。そして気持ちを切り替えた彼女は、自らの愛機の調整のために艦内へと戻っていく。

第12話 重力戦線

第12話 重力戦線

〈ワシントンDC・ホワイトハウス〉

アメリカ合衆国大統領ジョン・レーガンはホワイトハウス内にある一室の窓辺に立ち、夜の闇の中で黄色くライトアップされたワシントン記念塔を眺めていた。彼のすぐそばには国家安全保障担当補佐官のジェイク・カールツチと、部屋の扉の両脇には2名のシークレットサービスが控えている。

ワシントン記念塔を眺めながら、ジョンはネクタイを緩めると背後に控えるジェイクに問いかけた。

「それで、ー準備の方はどうかね？ ジェイク」

大統領の問いかけを聞いたジェイクは口元を緩め、「万事抜かりはありません、大統領閣下」と答える。腹心のその言葉を聞いたジョンは、自分もまた口元に笑みを浮かべながら体を振り向かせる。

「さすがだよ、ジェイク。君に頼んだのは良い選択だったよ」

「ありがとうございます、大統領。私も任務の責任者に選んでいただきとても感謝しております」

「ハツハツハツ。そんなに謙遜しなくてもいいよ。……さて、現時点での進捗状況を報告してくれ」

ジョンはそう言っつて、これから行われる作戦ーOperatio
n Great Discoveryについての説明を求めた。

しかし、ジェイクはすぐに答えず、代わりに視線を扉の側で控える2名のシークレットサービスへ向け、逡巡の表情を浮かべる。そんな彼の顔を見たジョンはゆっくり首を振る。

「心配しなくてもいい。2人はこちら側の人間だ。ーさあ、説明を」
ジョンの言葉を聞いたジェイクは頷くと、ようやく作戦の説明を始めた。

「皇国の旅団を乗せた貨物船はすでに作戦海域に到着しています。人員は2個中隊約200名。武器装備については帝国軍装備を使用」
「足が付く可能性は？」

「ありません。すでに我々が関与した痕跡は消去しています」

それを聞いたジョンは顎に手を当てる。

「こちらの方は？」

「上空からの支援を行う部隊ならびに、機体〃を載せた輸送艦も作戦海域に到着しています」

「詳細を」

「機体はA T S F 計画（先進戦術歩行戦闘機）での試作機であるY F - 22を5機使用。5機とも跳躍ユニットの強化を行なっていますので、迅速に島内への侵入ならびに空爆、その後の戦域離脱が可能です」

「搭乗衛士は？ それと、例の薬剤〃はすでに投与済みかね？」

「それについても問題はありません。搭乗する衛士は全て日系人です。そして薬剤ですが、ビタミンサプリとしてすでに服用させています。効果はC I A が保証しますよ」

ジェイクはニヤリと口角を上げる。

「グアテマラのブラックサイト（米国外にある秘密軍事施設）で実施した投薬実験で、マインドコントロールの効果は実証済みです」

「設備と研究者を国外に移動させておいて正解だったな」

「ええ、大統領」

「仮に作戦が失敗したとしても、各国政府は、その出来事を日本が行ったと認識するだろう。……全ては、日本が画策した陰謀だと、ね。我々には問題ない。いや、逆に我々にとって良い方向へ転ぶ。どういうことか分かるかね？ ジェイク」

「その事態を我々が收拾すれば、レイブンスロックへ恩を売ることができ、彼らとの交渉で優位に立つことができる。そして、日本に関して言えば、この件をきっかけに再び我々が政治的コントロールを握ることができるといふことでしょうか」

「そうだ、その通りだよ。ジェイク」

ジェイクの言葉を聞いたジョンは両手を大きく広げ、まるで難しい問題の答えを見事に導き出した生徒を褒めるような感じで肯定する。

そしてジョンは机の引き出しから1枚の新聞紙を取り出し、それを机の上に放り投げる。新聞には大きく『日本、東アジア及び国連での

影響力拡大か!』という見出しと、その見出しとともに載せられた写真には、黒い髪を撫で付け、メガネをかけた壮年の男が写っていた。

その男の顔を見たジョンは忌々しそうに顔を歪める。

「榊総理率いる日本政府は『国際協調の名の下』に周辺国へ積極的援助を行なっているが、実際は国際政治における自分たちの土台造りだろう。だが、国内に目を向けようだ」

「情報アナリストの分析によればー」

「そうだ。国外への産業基盤移転に伴う失業率の増加、国防費確保のための大幅増税と公共サービスの削減、軍部の台頭。榊総理自身は対BETA戦へ向けた日本の戦力基盤強化という目的で政策を遂行しているが、その『強引』とも言える政策を良く思わない者たちもいる。特に將軍家と、彼らを崇拜する者たちだ」

「ええ、仰る通りです、大統領。すでに帝国内は保守派と革新派、国内派と国外派などで分裂状態です。もし彼が政策上で何かしらの失策を行えば、帝国は政治的機能不全に陥り、最悪内戦に突入する可能性が非常に高いです。ーまあ、その可能性はこれまでに何度も議論されてきましたが」

太平洋戦争を戦っていた日本は、当時同盟国であったドイツに連合軍が投下した原爆の凄まじさを目の当たりにし、国体の危機という観点から、1944年連合国に対して『条件降伏』を打診。連合国側はその案を受け入れ、日本は連合国に降伏した。

その後、連合国によって大日本帝国から日本帝国へと国名を変更した日本は、占領下で各種民主化を實行していった。国際社会への復帰後は日米安保条約の下、東西冷戦における反共の防波堤としての役割を果たしてきた。

だが、家の表札は変わっても、中に住む人の考えは変わらなかった。

自主独立と対米追従、政府と国民、戦前から続く皇帝を頂点する専制体制と戦後民主主義体制、戦後混乱期から続くこれらの問題によってこれまで日本は二分されてきた。国内の蠢動は国外からの介入を招き、今では多くのスパイが公然と諜報活動を行ない、政治に至ってはイデオロギー対立から常に空転している。それが今の日本の現状

だ。

ジョンはそれまで緩めていたネクタイを締め直すと、肩を軽く揉み始める。

「我が国〴〵の極東防衛の要である日本がこれ以上混乱するの容認できません。この作戦の本当の目的は〴〵日本の浄化〴〵だ。これまでの混乱の元は将軍家と、それを支えてきた武家制度だ。この戦前の残滓とも言える彼らを潰せば全てに片がつく」

「全ての責任は〴〵日本〴〵に。榊氏には全責任をとってご勇退していただき、その後釜には親米派の政治家を総理に就かせる予定です」

「そうだ、そうだよ、ジェイク。ありがとう。では私はまたシチュエーションルームに戻るよ」

「私はペンタゴンへ戻ります」

力強く頷くジェイクの姿に、ジョンは笑みを浮かべる。そしてネクタイを締め直し、スーツの皺を伸ばした彼は扉の傍で控えているシークレットサービスに軽く頷く。最後にジョンは机をぐるりと回り、ジェイクのそばに来るとそつと耳打ちする。

「いいかね。作戦計画書に書いてる軍事介入については状況次第でない可能性がある。その時は……」

「ご心配なさらず、万事心得ております。大統領閣下」

ジェイクの言葉を聞いたジョンは何も言わなかったが、その代わりにジェイクの肩をポンポンと叩いた。そしてシークレットサービスに連れられ部屋を出て行った。

彼が出て行ってすぐジェイクは、作戦の状況を確認するためにペンタゴンへと向かった。

〈北太平洋洋上・帝国海運『秋津丸』船倉〉

「オイッ！ 開けろ！ さっさとここを開けろっ!!」

帝国海運の機関士である田島は大声で叫ぶと水密扉を激しく叩く。だが、何度叫ぼうとも誰も答えず、彼は大きなため息を吐くと水密扉を背に力無く座り込んだ。

「お疲れか？ 田島よお」

項垂れる田島の耳になんとも気の抜けた男の声が届く。その声を聞いた田島が視線を上げると、そこには木箱の上で仰向けに寝そべって、タバコをぷかぷかと燻らせる先輩の小川がいた。

呑気な小川の姿を見た田島は先ほどよりも大きなため息を吐くと、立ち上がり、そこへ向かう。そして近くにおいてあった椅子にドカッと座った。

「なんでそんな呑気なんですか？ 俺たち閉じ込められてんすよ？ 殺されちやうかも知れないんすよ？ ってか、ここ禁煙」

まるで関を切ったように喋る田島の声に顔を顰める小川。

「ギヤーギヤーと一度に喚くなよ。そんなんだから、お前は童貞なんだよ」

天井の蛍光灯を眺めながら小川はそう言葉を返す。

「童貞」 という単語を聞いた田島は顔を羞恥心から頬を紅くすると、どもりながら反論する

「お、俺は、ど、童貞じゃないっすよー！」

「はい、童貞決定。落ち着きないヤツは大概童貞って決まってるんだよ」馬鹿にされてワナワナと震える後輩を見ながら、小川は「ヨッコイショ」と言つて体を起こす。そして近くに置いてあったコーヒー缶にタバコの灰を落とす。そして再度口に啜えると、体のコリを伸ばすために大きく伸びをした。

「ウウ〜と、いいか田島よ。俺たちは確かに閉じ込められてるが、殺されたりはしねえよ」

「なんでそう言えるんすか？」

田島の疑問の声を聞いた小川は頭をガシガシと搔くと、ゆつくりと理由を述べ始めた。

「連中がプラントからこの船に乗り込んできた後、すぐに船員は捕えられたが、なぜか機関室だけは監視付きでそのまま運転させられたろ？」

「はい」

「てことは、連中には船を操作するヤツは一人もいないってことだ」

「そうすつか？ じゃあ、なんで今は閉じ込められてんすか？」

「連中の目的地に到着したか、もしくは別の目的があるのかもな。どっちにしろ、船を動かすには機関士である俺たち2人がいるってことだった」

「……」

小川の説明を聞いた田島は何も答えず、代わりに「大丈夫かよ？」っていう表情を小川に向ける。それを見た小川は、すっかり短くなつたタバコを缶コーヒーに突っ込むと、再び寝そべった。

「心配すんなって田島。俺たちは死なねえよ。だから今は静かに時を待ってろ」

「は……」

先輩の言葉を聞いた田島は力無くそう頷くと、自分も先輩に習って空箱でベツトを作り始めた。

後輩の姿を見た小川は寝返りを打つと、壁に設置された赤い消火ホースの箱をぼんやりと見つめる。

小川自身これから自分たちがどうなるか不安で一杯だった。だが、先輩である自分すら田島のように喚いてしまつては、いよいよ手がつけられなくなる。

「(ハア……どうすつかな……)」

消火ホースの箱に備え付けられている赤ランプを見つめながらそう心の中で呟く。

「(そーいや、なんであの消火栓、ケーブルが刺さってんだ?)」

第13話 開戦の狼煙

第13話 開戦の狼煙

夜空に浮かぶ月が照らす北太平洋上にあるシルトクレーテ島の周辺海域では、突如世界に出現したその未知の島に対応するために出動したアメリカ第7艦隊第9空母戦闘群による海上封鎖が行われていた。

未知の島『シルトクレーテ島』。そして、その島を実効支配している謎の武装勢力である『レイブンスロック』。一時は武力衝突の可能性すらあったが、米国政府とレイブンスロックとの交渉の末、『双方48時間武力行使を行わない』という条件を交わし、なんとかその危険は一時的にはあるが取り除くことはできた。

だが、これは、これから起こる戦いの前の一時の静寂でしかなかった……。

アメリカ第7艦隊第9空母戦闘群所属のミサイル巡洋艦『カール』は、艦隊司令部から発せられた命令に基づき、他の艦艇とともにシルトクレーテ島周辺海域の哨戒任務を遂行していた。

艦橋の外で暗視眼鏡を手に海上の監視を行っていた1人の海軍兵士が、かすかに「エンジン音」らしきものを耳にした。

「どこだ……どこから……？」

そう呟きながら、暗視眼鏡で必死に周囲を搜索するが、エンジン音を発する物体を見つけない。しかし、だんだんとそのエンジンが大きくなっていることから、そのエンジン音を発する物体は着実に艦に近づいてきている。

「どこだっ、どこにいやがるー！」

大きくなってきたエンジン音を耳にし、焦りだす海軍兵士。そしてようやくそのエンジン音の正体をその目に捉えることができた。

「ーっ！？」

その物体をようやく発見した海軍兵士は驚愕する。

それは――海面を切り裂きながらこちらへと近づく一隻の小型ボートだった。だが、兵士が驚いたのは小型ボートに積まれていた物体 〃だった。ドラム缶に取り付けられていた箱状の物体から、それが爆発物であると認識した兵士は急いで上官に報告しようとして艦橋に戻ろうとした瞬間、

「はっ。」

背後で発生した凄まじい爆発音、その直後に発生した爆発と爆風に全身をズタズタにされ、一瞬のうちに絶命した。

シルトクレーテ島の地下司令部内は、突然洋上で発生した艦艇の爆発に、オペレーターたちが大騒ぎしていた。

「なんだ！ 何が起きた！」

「――H Q、H Q！ こちら沿岸監視部隊。何が起きた！ 船が爆発したぞ！」

「――爆発は、こちら側の攻撃か何か？ 状況の説明を求む！」

「わ、わかりません！ こちらでも爆発を確認しましたが……！」

「状況確認を急げ！」

「はっ！」

司令官室に座っていた部隊司令官であるハメルもあまりの出来事に目を大きく見開き、驚愕に身を固める。しかし、それも束の間、歴戦の指揮官である彼は席から立ち上がると、眼下であたふたと浮き足立つオペレーターたちを一喝する。

「落ち着け！」

彼の声を聞いたオペレーターたちはびくりと肩を震わせると、一斉に動きを止め、自分たちの司令官に注目する。皆の視線が自分に集まったことを感じたハメルは、気持ちを落ち着かせるため一度大きく息をする。

「いいか、突然のことに私も衝撃を受けている。諸君の動揺もよく分かる。だが、こういう時こそ落ち着くのだ。まずは現時点での情報を集め分析する。作戦展開中の全部隊には警戒体制をとらせる。それと同時に洋上に展開する米艦の動きを逐一私に報告しろ、どんな些細

なことでもだ。最後に間違ってもこちらから攻撃するな。これを徹底するんだ」

「はっ!!」

ハメルに一喝によって落ち着きを取り戻したオペレーターたちはすぐさま行動開始する。

冷静沈着さを取り戻したオペレーターたちの姿に領くと、司令官席に再びを腰を下ろす。そして背後に控えていた兵士の1人を呼び寄せる。

「司令、何か?」

「閣下をお呼びしろ。お休みのところ申し訳ないが、ことがことだ。これから先何が起こるか分からん」

「はっ!」

ハメルの命を受けた兵士は、ビシッと敬礼するとすぐさま自分たちの最高司令官であるタクミの元へ向かっていた。兵士を見送ったハメルは、再び視線を正面モニターへと向ける。画面にはメラメラと紅い炎に包まれた米軍の艦艇が映っていた。

「(取り決めの時間が終了する1時間前の爆発。これは事故なのか、それとも……)」

海上で爆発炎上している艦艇を見ながら、ハメルは言いようのない不安に眉を寄せた。

「成功したか!」

海上封鎖線の外側に停泊していた帝国海運の貨物船『秋津丸』の艦橋にいた狭間是清(はざまこれきよ)は、自らが計画立案した作戦が計画通りにうまくいったことに大喜びする。

彼の背後に控えていた副官の男もまた喜ぶ。

「どうやらそのようです。しかし、体当たり攻撃がこううまくいくとは思いませんでした」

「ふ、我ら皇国の兵に不可能なことなどないのだ。それに戦艦というのは、大きく遠距離の物を破壊することはできるが、あのような小型

ボートのように小さく高速で動く物へ攻撃することはとても難しい。」

「はっ。是清様のご慧眼見事でございます」

「いや、この作戦に志願してくれた同志の挺身があつてこそ作戦は成功したのだ。……それで、〃かの者たち〃は動いているのか？」

「はっ。先ほど暗号通信で。すでに鳥は放つた、と……」

副官の報告を聞いた是清は顔に笑みを浮かべ、「そうか」と一言呟く。そして、はるか先の海上で紅く燃え上がっている米艦から目を逸らすと、足早に艦橋を後にする。

先陣を切つて歩く是清の後を副官が追う。

「我らもかの島へ参るぞ」

「はっ」

「良いか、この作戦は我ら……いや、帝国にとって大きな利益となるのだ。かの島にある未知の技術を確保し、それを米国との交渉材料にする。そして我らが待ち望んだ日本帝国の真の独立を勝ち取る。」

「万事心得ております、是清様」

「もはや、属国の誹りは受けん。長く帝国を縛り続けてきた鎖を今宵断ち切り、日本帝国は本来あるべき姿を取り戻す。そして、BETA大戦の一翼をなす」

長い艦内通路を抜けた是清は、貨物ドックのキャットウォークへ出ると、手すりに身を預け、眼下で行われている作業を見つめる。広い貨物ドックでは、皇国の旅団所属の武装兵たちが、ドック中央に固定されている3隻の上陸用舟艇に武器や弾薬を積載していた。

部下たちの姿を目にした是清は、手すりを強く握る。

「(そうだ。これから我らは、人類の歴史に新たな1ページを刻むのだ)」

「おい、いったいどういうことだ!! これは敵の攻撃なのか! 副長! 爆発したあの艦の艦名は!!」

「ミ、ミサイル巡洋艦『カール』と思われます!」

第9空母戦闘群所属の戦術機母艦セオドア・ルーズベルトの艦橋で

は、突然の爆発に関する情報収集を行っていた。だが、乗組員は皆突然の出来事に浮き足立ち、パニックを起こしていた。

「……こちらUSS・ミリアス。一体何が起きた！ 詳しい状況の報告を求む！」

「……カールとの連絡が全くつきません」

「……これは敵の攻撃なのか！」

海上封鎖を行っていた他の艦艇からも状況報告並びに指示を求める無線が多数上がってくる。その無線を聞いたセオドア・ルーズベルトの艦長は、艦長席を飛び降りると、通信手から無線機をひたたく。

「USSセオドア・ルーズベルトから作戦展開中の各艦へ！ これより、爆発炎上している艦隊所属のミサイル巡洋艦『カール』乗組員の救出を行う！ なお、救出を行いながらも、各艦警戒態勢を厳とせよ！ 繰り返す！」

再度命令を繰り返そうとした瞬間、艦橋の窓ガラスが大きく揺れた。それを目にした艦長は通信機の受話器を放り出すと、艦橋を飛び出した。そして物凄い勢いで飛び去った物体を見て、目を大きく見開くと、急いで艦橋へと戻る。

「おい！ 誰が戦術機の発進許可を出した！」

「戦術機？ いえ、誰も発進許可は出していません」

「なんだと……」

副長の言葉を聞いた艦長は驚愕する。

（見間違い、いや、あのシルエットは間違いなく戦術機だ。しかし、なぜ……）

「今、戦術機と思われる機影を確認した」

「ま、まさか！ 誰も発進許可は出していません、艦長」

副長はそう言つて艦橋を見回す。

「いや、間違いない。あれは戦術機だ。いいか、全周波数帯で呼びかけろ、そしてあの戦術機を今すぐ呼び戻せ。下手すれば、あの島にいる連中と撃ち合いになるぞ！」

艦長は視線の先にあるシルトクレーテ島を指差しながら、驚愕している通信手に命令する。

「な！」

「急げ！」

「は、はい。こちらアメリカ海軍所属セオドア・ルーズベルト。現在、当該海域上空を飛行中の全航空機並びに戦術機は直ちに、所属と姓名を明かし、当該空域から離脱せよ。繰り返すー」

通信手の呼びかけに対して何も応答がないことに艦長は顔を顰めると、すぐに副長を呼び寄せる。

「いいか、副長。だだちにこの事態を艦隊司令部に報告しろ。そして、応援の艦艇をこちらに向かわせるように言うんだ」

「は！」

艦長の命令を聞いた副長は、すぐさま艦隊司令部へ事態を説明するため通信室へと向かう。副長を見送った艦長は、再び艦長席に腰掛けると、大きく息を吸い込み、激しく燃え上がっている『カール』と、その先にある漆黒の闇に包まれたシルトクレーテ島を厳しい眼差しで見つめるのであった。